

語 調 原 理 序 論 (第一回)

井 上 奥 本

一、語 調

語調は言語の一要素にして我邦に於ても古來重視せられ、其の文書に顯はれたるものは古事記を最古とし、平安朝に於ては古今傳授・佛經音義等に之を活用せる事少からず、漢和字書たる「類聚名義抄」に至りては其和訓に聲符を施したるもの約一萬六千に達せり。然るに爾來此の事甚だ振はずして遂に其の傳を絶ちしが如し。降て江戸幕府の中葉に至り、無相文雄氏一種の四聲記號を定め、「和字大觀鈔」の附録に於て、「古今和歌集假字序」の全文に之を應用せられたれども、其法疎にして却て古法に劣れり。明治に及んでは、落合直文氏の「日本大文典」に少しく之を論せられたれども、其法古事記時代のものに依り、二三の單語を挙げられたるのみにして、之を熟語章句に施すべしと思はれず、茲に於てか明治の新法起れり。

明治二十年前後より、國語辭典の形式内容略緒に着きたれども、語調を記せんとするものなきを見て、山田美妙氏大いに慨し、其の原理を探りて、「日本大辭書」の著に當り、アクセント式を採て單語の全般に施し、其の調は東京風に依り、更に編尾に、三段十六頁に渡る音調論を附して世に出されたり。爾來高橋龍雄氏の「國定讀本發音辭典」、「日本のローマ字社」の「國定讀本の讀方」より、大正四年に出でたる榮田・近藤兩氏合著の「國漢字典」、今村明恒氏の「東京辯」に至る迄、皆此の式に依れり。元來アクセント式は古法に比し、簡にして單語を讀むには、却て古法よりも明確なり。然れども之を章句上に施しては、語調の事實を捕捉すること殆んど難し、其の理由例證は之を本論に譲る。伊澤修二氏は、明治四十四年「國定小學讀本正讀法」を著はすに當り、古法を用ゐずアクセント式に據らずして、別に一派を立てられたり。其の法一音語と二音以上のものと符號の類を異にし、恰か

も支那語の四聲と重念との關係に似たり、而して之を讀まんとするに、章句は勿論單語といへども其の要を知る事能はず、吾人のみならず、斯學の大家も、亦多くは伊澤氏の眞意を解せずと聞く、此くては氏の苦心も、實用に遠きの憾みは免れざるべし。

以上大家の研鑽を経たるも國語の聲調記法は、未だ其の基礎定まらざるが如し、我邦の聲音學猶獨立せずと聞けど、四十七假字の發音は通俗にして、其の價を誤まること甚だ稀なり、然るに語調記法になりては、一二の記號の定義すら、今日猶判然たるものなきは、甚奇ならずや。不肖積年思を此に潜め、稍得るところあるものゝ如し、因て之を古法に參するに、意を強うするもの二三に止まらず遂に此の編を成して以て世に問ふことゝはなりぬ。

二、語調學の大勢及びアクセント

世界各國言語互に異なりといへども、其の發音の大部分は共通せり、故に枝葉に至りては各特殊のものありとも、西洋に於て立てたる根本原理を以て、東洋語を推すに、大なる支障を見ず、然るに語調に至りては、各國根柢を異にするものゝ如く、諸大家の意見を綜合せんとするも、支離滅裂して拾收すべからず、今左に發表年次により數例を擧げて、以て其の梗概を示す。

サンダー氏著ユニオン第四讀本には、最初にエロキューションノ部ありて、語調を説くこと稍審なり其の略に曰く、

アクセントは一語中の或音節を他の音節よりも顯著ならしめる所の聲の張力方(Stress of voice)である

エンフッシズは章句中の一語又は數語を他のそれよりも顯著ならしめる所の聲の張力である

インフレクションとは讀書談話に於ける調子の數語又は數音に於ての曲り工合である

モデュレーションとは主題の思想感情に因て喚起せらるゝ高低強弱の變化である

山田美妙氏は其の著「日本大辭書」の緒言に於て述べて曰く、

(前略)ソノ仕方ハ耳ナドノ脆弱ナ感覺ハ頼メズ、音樂ニ云フ律ノ第一階ヲ「去」ニ配シ、其ノ上ヲ「平」ニ配シ、又其ノ上ヲ「上」ニ配シ、カタガタソレニ據テ高下ヲ定メルニ限ル。

又其の附録「日本音調論」中に曰く、

今日此ノ世界ニ數多ノ言語ノ種類ガ有ツテ從ツテ其ノ音調モ種々アルモノ、歸スル處音調ハ上ト平トノ配合ノ外ハナイ

ガ西洋デモマダ此ノ事ニツイテ精密ナ探求ヲ遂ゲタモノハナイ。辭書ニハ既ニ音調ヲモ舉ゲ盡シテアル。但シ其ノ原因ノ證明ハ乏シイ。支那ナドデモ早ク古代カラ此ノ音調ノ相違ヲ知リ所謂平・上・去・入ノ四聲ヲ分類シタモノ、其ノ四聲ノ各ガ種々ニ結び合ツタ熟語ナドノ音調ノ變化ヲハ證明セヌ。

島村抱月氏は其の著「新美辭學」に述べて曰く、

音度(Pitch)は言語に定着して抑揚(Accent)となる。されども我が國の言語は、人も知る如く、抑揚を用ふること比較的少なく「著」と「橋」、「神」と「上」、または一部に於ける疑問辭の語尾などの例の外、多く之によりて意義を殊にすることなし。

平仄といふ中には音の度すなはち抑揚と、音の長さ即ち長短との二理あることを得べし。此の兩者は古來東西ともに混じて用ひられ、支那にて平仄を或は音の開閉なりと云ひ或は音の長短なりといへる、はた西洋にて希臘の平仄は専ら長短に基き、近世英詩などの平仄は多く抑揚を用ひたる、皆此の事實を證すべし。

高橋龍雄氏の「國定讀本發音辭典」には曰く、

普通にアクセントは音の高さを示すものであると思つて居るが、唯單に、高低を示す場合に起るばかりでなく、音の強弱をも區分する場合に起るものである。否實に日本語の大多數は、高低よりも強弱のアクセントが多い様に思ふ。

アクセントは音の高低強弱を示す場合に起るばかりでなく、また音の長短遲速を區分する場合にも起る。

それでアクセントは以上高低・強弱・長短・遲速の四種ありとすれば其記號もまた四種作らねばならぬ理由が起つて来る。しかし、實用上、その高いと強いとは、一致する場合が多くて、また長い音が、短い音にうつる場合には、強い音となつて、アクセントを生ずる故、長音即ち、強音になる。而して長短と遲速とは、多くの場合に、一致して居る、それでアクセントの符合は、實用上一つで足りて居る。

遠藤隆吉氏の「視話音字發音學」には音調 (Modulation, or Change of Pitch) の條に記して曰く、

支那ノ言語學者ノ所謂調子ナル語ハ其ノ含ム所甚ダ廣シ。適當ニ言ヘバ調子ナラザルモノ迄モ其

ノ内ニ包含セシム。例ヘバ聲門ヲ急鎖シテ喉嚨ヲ止メタル如キモ亦音調ノ内ニ算ヘラレリ。

皆川秀孝氏講述の「清語會話」には更に奇なるものあり、曰く、

或る意味から云ふと清語の半面は殆んど音樂的で、英語で云ふ「アクセント」日本語でいふ口調音調が最も肝要なる働きを有て居るのである、之を稱して腔調と云ひ、俗語では重念と云うて居る、(重念とは重く讀むと云ふ意)(中略)其の重念の方法は、聲を一段張り上げ、四聲を正して發音する、重念の下字は上の重念の餘勢を以て軽く發すると云ふ丈けで別に六ヶ敷いものではない、云々。(注意、漢字の四聲は平・上・去・入なれども清語の四聲は上平・下平・上聲・去聲なり)

今一つ附け加へて置くのは重念の字の次にある文字は、其固有の何聲たるを問はず、多くの場合に於て軽く去聲又は上平の如く發音して差支ないといふ事である、云々。

此の如く重要な作用を持て居る重念は、次に上げた二つの規則によりて附せらるゝものである。

(一) 一語一句中、主となるべき文字に重念を附ける。

(二) 其意味甚しく肝要でなくとも、口調音調を整ふる爲に重念を附ける。

(前略)此重念は二字以上を以て組織せる詞には、一語一句悉く之を附けなければならぬのであるから能く玩味して其要領を御承知になつてほしいのである。

例を擧げて見ると「大爺」と云ふ言葉がある。

大爺 爺に重念を附ければ大旦那と云ふ意

大爺 大に重念を附けると伯父の意となる

又「我可以給僱錢」(私は君に錢を上げましょう)と云ふ詞がある、重念の附け方によりては、次ぎの如く其の意味が異つて来る。

我可以給僱錢 我に重念を附けると、私は君に錢を上げる、他の人はどうか知らぬと云ふやうな意となり。

我可以給僱錢 可に重念を附けると、私は君に錢をやる、やらぬのではないと云ふ意となり、我可以給僱錢 僱に重念を附けると、私は唯君にだけ錢をやる、他の人にはやらぬと云ふ意となり、

我可以給僱錢 錢に重念を附けると、私は君に唯錢だけやる他の物はやらぬと云ふ意味となる伊澤修二氏は「國定小學讀本正讀法」を著はし、卷一より卷四迄を悉く片假名字を以て記し、之が緒言に於て曰く、

一各語ノ綴字中、某字ニ「」ノ符號ヲ附スルモノハ其ノ字ニ音勢アルコトヲ示ス。偶二字以上ニ「」ノ符號を附スルモノハ、第一音勢第二音勢等ト名ヅク。

一、一音ヨリ成レル語ノ右側ニ「」ノ符號アルモノハ、「」平聲「レ」上聲、「」去聲ノ符號ニシテ、前欄謂フ所ノモノトハ、自ラ區別アリト知ルベシ。但入聲ハ、薩隅ノ方言ノ外、他ニ現存セザルヲ以テ、別ニ符號ヲ定メズ。

一、音勢ハ、古來歐米ノ言語學者中ニモ、種々ノ論議アリテ一定セザルモノナレドモ、我國語ノ音勢ハ、我が師「ベル」先生ノ會テ唱道セシ所ノ如ク、全ク一語中ノ某音ニ附スル微妙ナル長サノ差違ナリ。決シテ前欄謂フ所ノ四聲ト同視スル莫レ。

齋藤秀三郎氏主幹「正則英語學校講義録」には左の如し、

英語では二音節以上の語を平に一樣な強さで一樣の高さで發音することは決してない、必ず其の中の音の一つや二つは強勢を以て發音しなければならぬ、此の強勢を「アクセント」と云ふ。

では「アクセント」のある音は何んな風に發音すれば可いかと云ふに、邦語に於けるが如く唯單に音を高める丈ではない、それや幾分か其の音は高くもならうが、最も注意すべきは、其の音を強く發音することである、さうすれば勢ひ其の音は少し長めに且つ明かに發音されるものである。

(中略)夫れに對して「アクセント」の無い母韻は自然に皆微弱な曖昧な音になる(中略)「アクセント」の無い母韻は曖昧に發音するのが正しい發音である。

以上を通覽するに英語のアクセントの見解に二様ありて、山田氏島村氏は高低に因るとの説なれども、サンダー氏以下高橋氏皆川氏齋藤氏何れも強弱説に近くして、一は西人の自説に出で、他は何れも近年の著に係るを以て、此の定義は動かすべからざるものゝ如し、唯島村氏高橋氏及びベル氏が、長短に關すとせらるゝは、其の意を解せず、斯くては長短と強弱と相混じて、分析すること能はざるに至るべし、長短は常識上最も明瞭なるものなれば、短かくして強きはかく、其の弱きはしかく、と解き、又長くして弱きはしかく、其の強きはかく、と解すべし、或國の國語に

於ては、強きもの長く又弱きもの短かしと一定せりと、之を以て他國語を推すことは勿論不能にして、その一定せる國の語に於ても、此の法(強きは長く弱きは短かしと云ふ事)を以て解するは、科學的斷定なりとは云ふべからず、ベル氏の日本語に對する見解は、此の混亂に一層を加へたるものゝ如くにして、其の説たとひ他人のものよりも事實に近きが如き觀ある場合と雖ども、竟に論理に合せざるは明なり。

遠藤氏の支那語に關する説は、四聲と重念とを一括したるものなるか、將たアクセントとモデュレーションとを混同したるものなるか、明ならざれども、入聲は勿論四聲全部は、モデュレーション内に於て説くべきものにあらざるが如し、四聲は一字(一音節)に對する分類にして、モデュレーションの如く一句話以上に對するものにあらず、又其の音調の條中に述べられたる他の文義及び引例の國語は、皆インフレクションに屬するものにして、四聲の範圍を越えたるものなり、殊に支那に於ては、一句話以上の調子に對する研究は重念を指示する事の外、未だ査定せられたるを聞かざるをや、さればとて、四聲は一句話以上に關せずといふにはあらず、一句話以上となりたるものを、一字毎に切り放たば、其の分類は二聲若くは三聲に限るか、或は六種七種の聲類を成すかは、未詳の問題なるを以て、今はモデュレーションに對照するの時期にあらずと信するなり。

次に支那語の重念と四聲とを對比攻究せんとするも、皆川氏は「四聲の効用は恰も日本語の言葉を組織する文字の訓の如き作用を爲すものである」といへるのみにて、或は高低輕重の字を用ゐ、或は圖形を掲げ、或はそれに對する日本語を一個づつ配當せられたれども、遂に聲音學的解説に達せず、彼の重念の解説に輕重といへるを、強弱と見做し、此に高低を主とせるを、聲音學上のそれと覺るべきかと云ふに、必ずしも然らずして「重念は四聲の各の一層強きものなり」とも云ふことを得べし、現今の學界に於ては、「強弱」「高低」は既に定義を與へられたれども、輕重・抑揚等は未だ指す所定まらず、此等用語に關する注意は、遠藤氏の著「視話音字發音學」中に、適切なる一文あり、煩を厭はず左に借用して、以て自他の箴戒となす。

英吉利人ノ話ス處ニ據レバCニ軟キ者アリ、硬キモノアリ、何レニセヨ一定ノ意味アルコト疑フベカラズ、然レドモ伊太利人又ハスペイン人ガ硬軟ナル語ニヨリテ了解セルモノトハ甚異ナレリサクソン人ハHヲ以テ硬トシ、Bヲ以テ軟トナス、其ノ所謂硬軟ナルモノハ何ンゾヤ、甚ダ異ナル意味ヲ有ス、種々ノ國民ノ有スル父音母音ノ薄キ者、厚キ者、重キ者、輕キ者トハ何ゾヤ、此レ等ノ形容辭ヲ聞クモ吾人ハ如何シテ發音スベキカヲ知ラザルナリ、何人モ此レ等ノ形容辭ニ由リテ練習セラル、コト能ハザルベシ、是等ノ言語ハ單ニ人間ノ心ヲ迷ハシメ、眞心ナル發音ヲ摸寫スル能ハザラシム。一日有名ナル東洋學者ハ「ベル」氏ノ發音ガ自己ノ想像セシ發音ニ異ナルモノアルヲ聞キ不満足ノ色アリキ。且ツ自身ニ視話音字ヲ以テ或音ヲ筆ニシナガラ之ヲ發音スルコト能ハズ、而シテ「ベル」氏ガ單ニ東洋文字ノ記錄ヲ見テ音ヲ寫ス能ハザルヲ異メリ。此レ全ク「ベル」氏ノ發明セシ所ヲ知ラザルニ座ス。

要するに四聲と重念との對照に關しては、未だ皆川氏以上のものを見ざるを以て、此の問題は直ちに茲に決するを得ざるなり、島村氏がアクセントと平仄とを合説せられたるも、是亦大體論にして、

深く究めたるものにあらざるが如し。

次に日本語の聲調如何と見るに、山田氏島村氏齋藤氏皆高低説にして、高橋氏のみは強弱説なり、「日本のローマ字社」の機關雜誌「ローマ字世界」には、國定讀本卷一より同四迄を明治四十五年四月より大正四年に亘りて羅馬字を以て掲げ、之にアクセントを施して「(ノ)は高く(強く)云ふ標」と説けるは、如何なる理論に基けるにや、翻つて伊澤修二氏の説を見れば、一音より成れる語と二音以上の語と共通ならざること、支那語の四聲と重念との關係よりも甚し、此の如きは未だ他國語には聞かざる所なり、抑然らば日本語の聲調は強弱に基くか、高低に基くか、或は混同せるか、殊に一音語と二音以上の語とは共通ならざるか、又は共通記號に適せざるか、保科孝一氏が「國語學精義」に於て述べられたるが如く「一體アクセントの研究が現在きはめて幼稚で、未だ殆ど着手されて居ない」と云つてよろしいので標準が甚だ漠として居る」にも拘はらず、之が原理の第一階をも建つる能はざるか。

之を要するに、英語のアクセントは發音力の緊張の多少に因るものにして、強弱と高低とは並行的に増減するものなり、故に stress は張り方とも壓力とも譯すべきものにして、之を抑揚と譯すべからず、抑揚なる熟字を用ゐるときは、強音は抑音に配することを得るも、弱音に配するに揚音なる文字を以てすべくもあらず、元來強音は緊りたる音にして、弱音は緩びたる音なり、緊りたるものには抑字を配すべきも、緩びたるものに揚字を配する事は不能なり、故にアクセントなる名稱が、「一般英語章句の調子を代表する場合」の外、「狹義のアクセント」は、決して之を抑揚と譯すべからず、之に更ふるに「張弛」若しくは「大小」等を以てせば、或は可ならん、「大小」は文字平凡なれども、却て事實に適切なるべし、故に吾人は場合により、此の語を用ゐんと欲するものなり、古き英和辭典に、アクセントを解して、「發音の抑揚」とも「少しく調子を壓し着くる事」ともあるを見て、壓し着くる事は抑なりや揚なりやと、大いに迷ひしことありしも、「抑揚」は廣義の場合に用ゐるべくして、「壓着」は狹義の時のものなることを知りてより、此の疑問は明瞭となれり。

英語のアクセントを以て發音力の張弛にありとせば、支那語の重念が之に匹敵することは、其の呼法より見るも、又英語は二音節以上・支那語は二字以上のものには必ず發生すべき點より見るも殆んど明白なり、更に前條に擧げたる支那語の用例に準じ、サンダー氏の用例を擧ぐれば、

Col'league	同僚(名)	Col'league	聯合する(動)
Con'duct	行爲(名)	Conduct	導く(動)
Des'cant	論說(名)	Descant	講說する(動)
Obj'ct	目的(名)	Object	反抗する(動)
In'terdict	禁止(名)	Interdict	禁する(動)
Over throw	轉倒(名)	Over throw	倒す(動)

等ありて、益々其の相似たるを知る、唯異なる所は、重念の字に四聲の別ありて愈々嚴守せらるゝにも拘はらず、アクセントのある音節の調は一種の呼法あるのみにして、唯アクセントなき音節に對してのみ異なりと云ふを得るに過ぎざる點にあり、然るに古來の漢字の四聲及び支那語の四聲と

日本語の聲調とに至りては、前各條中何等の得る所なかりき、因て次回に於ては先づ古今の四聲を再攻せんとす。

(六六)

語調原理序論 (第二回)

井 上 奥 本

三の一 清語の四聲

支那の字音は、英語の音節 (Syllable) に比し、其組織稍簡にして、隨て種別遙に少なし、然るに、一音各四聲の別ありて、以て其の用を廣からしむ、太初より其の質ありと雖ども、人文未だ明ならず、宋末に至りて、漸く四聲の目あり、梁の沈休文、創めて之が譜論を作れりと云ふ、爾來千餘年、清初編輯の康熙字典、亦之に依れり、然るに、近時に至りて重念の説あり、四聲の實質亦古に異なり、思ふに、滿蒙に入聲なき事、猶古の南天竺の如くにして、時俗は滿風に依り、詩文には漢調を規とするに至りしもの、如し、從て今の南清音は、猶古法の如しと聞く、因て茲には四聲を二種に分ち、南調を漢語と呼び、北調を清語と稱ふことゝす。

清語は普通に北京官語と稱し、上平・下平・上聲・去聲の四調に分つ、其の呼法を例すれば左の如し。

廣部精氏の總譯亞細亞言語集に出でたるものを表とすれば、

聲別 解		國語例	
上平	聲ノ平ニシテ豊キモノ	ヲ	ヤ
下平	聲ノ平ニシテ輕キモノ	ナ	ニ
上聲	聲ノ上リテ猛ク烈キモノ	ヲ	ー
去聲	聲ノ去リテ衰ク消行様ナルモノ	ソ	ヲ

にして第一圖は其の繪解なり。

皆川秀孝氏は其の著清語會話に於て、

上平 平らに高低なく發音する

下平 音尾を軽く上げる

上聲 長く引く 別所に曰く「圖は長く下に引てある」

去聲 音尾を消ゆる様に發聲する

同感の意味に發聲するハー(ソーデス)

疑問する時のナニ(何)

感心した時のハーア(ナルホド)

了解せし時のソウ(デスカ)

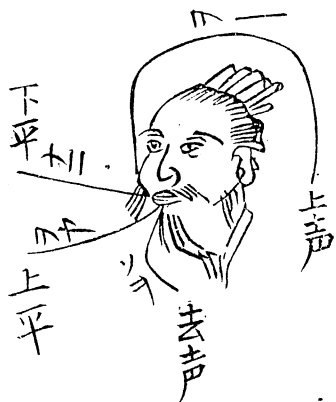
と解けり、其の繪解は第二圖之なり。

之等を見るに、二表の對照上は勿論、其の一表内に於ても、廣部氏の上平と下平とは、重念あると否との如く、皆川氏の上平と上聲とは、實質上の區別を認め難し、若其の上聲は下る氣味ありとすれば、氏の去聲と相似たるものとなり、殊に廣部氏の上リテなる解と相反すべし、兩氏が之に引用せられたる國語は、東京調ならんも、之を知らざるものは勿論、若東京人なりとするも、東京市内各方面と各社會とによりて、大差あれば、之が會得は随分困難なるべし、清語會話の書は、此の他數多けれども、皆之よりも疎なるものゝみなれば、茲に舉ぐるの要なかるべしと信するなり、唯伊澤修二氏の「視話應用音韻新論」に出でたる記號は、かゝる解説を附せられざれども、却て自己矛盾に陥らず、稍其の實を捕捉し易きが如し、因て之を第三圖に挙げたり。

文書に顯はれたる四聲の解は、以上の如く區々にして且つ非科學的なるも、現に支那人の多數が使用しつゝある言語の呼法を究むるに當り、強て文字に泥むの要なし、因て之を實地に教したるもの

第一圖

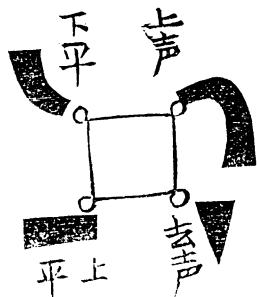
總譯亞細亞言語集 廣部精氏著



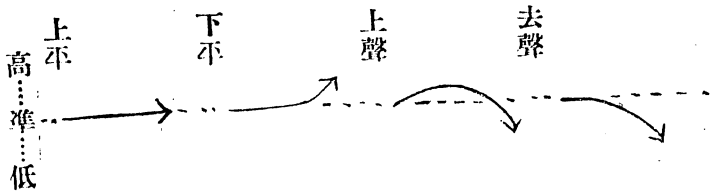
第二圖

清語會話

皆川秀孝氏述



第四圖



第三圖

視話應用音韻新論 伊澤修二氏著

上平 一
下平 ✓
上聲 <
去聲 、

に諸家の説を參酌し、矛盾を起さざる程度に於て、第四圖を得たり。
 此の圖は通俗的高低式にして、古人が漢語の四聲を論ずるにも、今人が清語の四聲を説くにも、皆用ゐる所の意相なり、而して此の意相は、二字以上(二音節以上)の接續に於ても、重念アクセントを説くに當りても、常に世人を迷宮に導きし所のものなり。

茲に至りて之を考ふるに、更に最とも通俗的にして最とも明瞭なるは、發音力の全量を幾何學的平面に展開して示すにあるを以て、國漢文の記憶に隨ひ、之を下行式に顯はして、左の如き圖形に到連せり。

上平

下平

×

上聲

去聲

下平圖の×は聲帶閉を表す

此の圖は、或は高低思想により、或は中值單位を用ゐる(事物を大中小又は上中下等の三種に分ち、中を以て規準とする)ことなく、また之に重念若くはアクセントの條件を附加するも、何等の撞着を來すことなし、此の圖を一覽するときは、上平・去聲は直ちに之を知り、上聲は前半を上平に擬らへ、後半は去聲の短呼に據るものと見ば可なり、唯下平に至りては、稍解し難きが如きも、發音を終はると同時に聲帶を閉づるものにして、其の調は上平に均しと知らば甚だ簡なり、聲帶の閉ぢらるゝに隨ひ、漸次音は高強となるものなれども、「下平は上平よりも音尾高強なり」とのみにては、判然其別を知り難く、且つ其の要を得たるものにあらず、廣部氏皆川氏、共に引例の國語に疑問のナニを用ゐられたるは、其の眞意何れにあるやを知らざれども、蓋し此の語は、他の三語の如く語尾開放(聲帶の開放の儘)にては、其の調を爲さざるべし、但し此の閉塞を以てナニの如く、
 普通通の促音を爲すものと思ふべからず、ナニは舌を以て氣道を閉ぢ、此のナニは唯聲帶の閉ぢを閉づるものなることに注意すべし、伊澤氏の視話應用音韻新論に、「聲帶閉」を解して「南清語の入聲に用ゐるのみならず、北京語でも云々、上聲にてパーッといふ時は、強く聲帶を閉ぢるが、去聲にてパーッといふ時には、聲帶を閉ぢない」といへるもの即ち是なり、(新論に上聲とあるは、下平聲の誤なるべし、然らざれば事實に反す)
 英語の一音節なる獨立語が、殆んど去聲に均しき調なるは明にして、更に之を分析追究するの要なかるべく、又清語英語共に音短かくして、右の範に入り難きものも稀にあれども、之等は別に後段に至りて述ぶるの機あるべし。

三の二 漢語の四聲

漢語の四聲とは、古來我國に傳はりたるものと、現今南清人の用ゐつゝあるものとを、一括せる稱なれば、之を實驗するに優れる方法なれども、未だ其の機會を得ざるを以て、暫く彼土古人の韻書に依り、其の要を摘めば左の如し。

字彙直圖

元和韻譜

康熙字典

平聲	初發聲	衷而安	平道莫低昂
上聲	升上	厲而舉	高呼猛烈強
去聲	過去	清而遠	分明哀遠道
入聲	聲盡入	直而促	短促急收藏

右の中、元和韻譜の「衷而安」は、多くは「哀而安」に作れども、和漢字名録には、前記の如くあり

て、却て此方當れるが如し、若し「哀而安」とすれば、他の二書の解に應ぜざるのみならず、「清而遠」とも相似て、自家混亂に陥るべし、因て今は字名錄に依れり。

扱以上の例を清語の四聲に比するに、平聲に上下の變なくして、別に入聲なるものを擧げたり、これは時代の變遷又は地方の慣習上、奇とするに足らず、元より入聲は聲調の類別とすべきものにあらざれども、英語にありては、入聲と見るべきものも他の各種の音節も、皆同一律なるに、漢字に於ては、入聲以外の音節には各三調ありて、入聲には其の變轉なきを以て、一般的なる三調に、此の特殊の發音を加へて、四聲と稱へたるは、咎むるに足らざるべし、若又此の入聲を、他の三調の何れに屬せしむべきものなりやと云はば、去聲に編入すべきものなるべし、そは悉曇字記に涅槃點を去聲とし、悉曇愚抄には之を解して「南天ニハ、州域ノ風俗ニテ、涅槃點、入聲ノ假名ヲ不_レ成只、去聲ト見テ、アトノミ唱フル也」と云へるものは也、又「反音」^(後に出ず)には、去聲をサルコへ、入聲をイリテサカルコへと解せり、之亦其の證なり、隨つて清語の條に述べしが如く、英語の一般の聲調と漢語の入聲とは、略同一調にして、皆去聲に近似せるを知ることを得べし、英語學者が「語尾なる父音字にアクセントなし」と云ふもの亦之なり、之を以て思ふに、本居氏が漢字三音考に於て「長の平上去、短ノ平上去ト、六聲ニ分クベキヲ、約メテ四聲ト定メタルハ、長聲ノ方ノミヲ三ツニ分ケテ、短聲ヲバーツニ渾シテ入聲トシタルモノナリ」と云はれたるは、稍強辯にはあらざるか、何となれば、短音は長音に比し變轉の範圍狭く、從て調類も亦少なかるべきは自然の理なればなり、但し入聲は純短音にはあらで、語尾に促分あるを以て、呼法急にして變轉能力の幾分を缺けりとする

るも、必しも一調に限るとは云ひ難し、今退て國語の促音を見るに、二調ありて、東京附近に用ゐるものと、京坂地方に用ゐるものとは、正に相反せるが如し、之等を一地方のみより推斷して、「促音は一調に限る」とも云ふべからず、然るを強て一調説を主張するは、「アクセントあるは長くアクセントなき音は短かし」と解して、其の國語内に撞着を起さざると一般にして、此の如きは元より科學的解法ならざれど、其の國內に於ては笑ふべきにもあらざるなり。

次に北漢語調の實質を考へ、清語の四聲と對比するときは左の如くなるべし。

清語		漢語		垂直圖形
上平	下平	上聲	去聲	
入聲	入聲	入聲	入聲	

入聲圖の×は聲帶閉にあらず
唇閉・舌閉等を表す

右の中、平聲は異議を容るゝの餘地なく、去聲入聲は前條に述ぶるが如しとせば、稍疑はしきは清語の下平・上聲に對する漢語の上聲なり、殊に廣部氏皆川氏の解説文を探て、古人の説に配せんとすれば、五里霧中に入らずんば止まず、然るに幸に伊澤氏の實驗は之を解て餘りあり、そは他にあらず、「南清語の入聲と官話の上聲(北京語の下平なること前に云へり)とは聲帶を閉づ」と云ふもの之なり、元より發音上に於ても、カクツの別オヲの別等に苦しみて、之を一括せんとする人あるが如く、

下平と上聲とは、之を一と見るも二と見るも支障少なきが如きも、實は此の下平と上聲とは、呼者聽者共に判然區別を知りつゝも、其の源因を斥す事能はず、隨て文書上に於ては、一も判然たるものなきなり、されば伊澤氏の閉帶説は、南清語の上聲に關せず、古人の説明及び用例、亦些の疑點なく、加ふるに清語には聲帶閉を有するに對し、漢語には其の他の氣道閉を有するものと見ば、此の兩語は促音類似の調に於て相對的となりて、上聲に於ては兩語同一なることを信するを得ん。次に本邦學者の漢語の四聲に對する見解を伺はんとするに、如何なる故にや、鎌倉以前のもものは全然上記の格に反し、江戸時代にありても、鎌倉以前に一致するものと、別に一派を立てたるものとあり、因て發表年次に依りて左に數例を擧ぐることにす。

文字反は一に反音とも題し、明恵上人時代の作にして、高山寺の經藏第五十三の箱より出で、今は某氏の所藏となれりと聞く、之に載せたる四聲圖の注を列記すれば、

平聲 タヒラカナルコヘ

上聲 アカルコヘ

去聲 サルコヘ

入聲 イリテサカルコヘ フツクチキ是ヲ爲平性ニ別文字ノ末ニ借名也

とありて次に左の五十音圖を擧げたり。

五音云者 (編者中、假字の異形なるは現行のものに改めたり)

アイウエオ

カキクケコ タチツテト サシスセソ

ハヒフヘホ ナニヌネノ

ヤイユエヨ ワヰウヱヲ ラリルレロ

マミムメモ (ヤイユエヨに聲符なきは原書の誤ならん)

釋契沖氏の和字正濫鈔には、

平聲は聲の本末あがらず、さがらず、一文字の如くして長し、上聲は短かくして、すぐのばる、

去聲は、なまるやうに聲をまはす、

入聲は下にふつくちきの音ありて切直なり、

日ヒ 樋ヒ 火ヒ 橋ハシ 端ハシ 箸ハシ

毛モ 蹴モ 食モ 弦ハシ 釣ハシ 鶴ハシ

寺島良安氏著和漢三才圖會には、

按異朝文字ニ不レテ用ニ訓點而言語ニ四聲分一明也日本ニハ言語ニ不レテ辨ニ四聲一而音訓兼

用ル故事物特ニ分一明ナリ也

和語ニモ亦有ニ四聲自ラ相備ヘル一矣 チャワンナンモク 茶碗天目 ハシベンシ 箸端橋

塩梯ハシ 蠟ハシ 弦釣ハシ 鶴ハシ 三物同訛ニ異物也 自ラ有ニ平上去ノ之別

無相文雄氏の和字大觀鈔には、

(四八)

四聲と云事、日本にても、久しき代より、習らひ傳へたれど、あやまる事あり、茶碗天目を借りて、教へたるは、日本の四聲にて、支那の眞の四聲にあらず、平を上とし、上聲を平聲に取り違へたる、千古の謬なり、たとへば、假名遣大概の書にいへることく、橋平端上箸去を、平上去といへるなれど、もろこしの四聲には端平橋上箸去の次第なり、云々、去は和漢ともに、同じく、箸と云ふの類にて、云々、然れば日本に傳へたる上聲を平と名づけ、日本の平を、上聲とし、入聲を改めかへて、眞の四聲となるなり云々、

同氏著の磨光韻鏡後編指要録には、

平ハ平聲、日ハ上聲、火ハ去聲、筆法ノ筆ハ入聲ナリ、又明ハ平聲、惡ハ上聲、飽ハ去聲、惡口ノ惡ハ入聲ナルカ如ク、千言萬語四聲ヲ出ルコナシ、是レ蓋シ平安城ノ音ヲ用ヒテ四聲ヲ示スノミ、或ハ邊國ノ人ハ平ニ呼ブベキヲ上ニ呼ビ、上ニ呼ブベキヲ去ニ呼ブ等ノ違ヒアルハ、其國國ノ方音ニ隨ヒテ四聲ノ名モ所ヲ更フルコナリ云々、平上去入ヲ詩家ニハ平仄ト云、仄ト側ト同字ニテ、ソバダツト訓ス、ヒツミアルコナリ、上去入ノ三聲ハ其聲平ナラス、ヒツミアレハ仄ト名ケタルナリ、

本居宣長氏ハ漢字三音考に於て左の如く云はれたり、

皇國ニテハ、昇ラズ降ラズ平ラカナル聲ヲ平トシ、昇ル聲ヲ上トシ、降ル聲ヲ去トシテ、其聲各其名ノ如クニシテハ律ニ叶ヒ、絲竹等ノ物音ノ低昂ニヨク合ヘバナリ、然レモ今ノ音ハ平聲ノミクマシテ、平上ハベタガヒニ説リナリ、平聲トスル者ハ昇ル聲ナレバ、實ハ上聲、上聲トスルモノハ、平ラカナル聲ナレバ、實ハ平聲ニシテ、皆其名ニ違ヒ、物ノ音ノ低昂ニ合ハズ、云々、

同氏の古事記傳には (文中の(一)は原文の割注なり)

(前略)契沖が云く、平上去の三聲を一音の言にていはい、日は平、麵は上、火は去なり、毛は平、蹴は上、氣は去なり、二音の言は、橋は平、端は上、箸は去なり、弦は平、釣は上、鶴は去なり、此の類にて意得べしといへり、此の説の如くにて、平は上らす下らす平なる聲、上は上る聲、去は下る聲なり、(漢國にては下といはずして、去といへれども、下る外なし、又今の世の唐音の四聲は、訛れるものにて、實にたがへり、)云々。

佐藤寛氏著本朝四聲考に引ける韻學私言には曰く、

本邦之語、猶華域之音、今呼レ柿曰ニ葛幾、則雙深、曰ニ渴起、則雙淺、俱無高低、而平聲也、呼レ垣曰ニ葛起、則先深後淺、而如上聲、呼レ蠅曰ニ渴幾、則先淺後深、而如去聲、又如上下二字、各上去兩聲互異其義、而與國語ニ自相符、上曰ニ渴彌、下曰ニ失腰、則上爲去聲、下爲上聲、乃指ニ在ニ高在ニ卑之詞也、上曰ニ渴極、下曰ニ沙極、則上爲上聲、下爲去聲、乃升之降之之義也、(編者中、一般に深淺用字を異にせるに概のみ兩様に用ゐたるは疑はし、又沙極は原訓サクミナリ、今改む)

以上を通覽するに、文字反の解は支那原書のものとは異なる所なけれども、之を五十音圖に施したる上に於て、如何なる調の顯はれ居れるやは未詳なり、其の他のものは二派に分れて、契沖氏寺島氏

實に自然の勢にして、他の國語より類推するを得ざる點又茲にあり。

古代日本に輸入せる四聲は如何の實質なりしか、思ふに當時彼との交通少なくして其の眞を得難く、且つ國情に適せざる此の四聲を内地に流布せん事は勿論、學者間に於て之を保持傳承することも、必ずや一大難事なりし事疑なし、古事記に用ゐしものと佛經音義其の他のものとは、同一なりや否や、所謂先深後淺なるものを古は平聲とし、降て江戸時代には之を上聲と思へること、又先淺後深なるものを、中古に於ても近世に於ても去聲と認めたる、共に去聲なる名稱とも古代の韻書の解説とも甚だ遠きの感なき能はず、殊に去聲は現今の南清語及び北京官話は、共に古來の名稱にも其の解説にも撞着せざるを見れば、如何に考ふるも日本古來の用法に信を置き難し、或は先深後淺は穩和なる呼法なるを以て、之を聲調上の中正なるものと信じて平聲に當て、其の他を便宜上漢名に配當せるにはあらざるか、こは平は中にあるべく、上は昇るべく、去は降るべしてふ、本居氏の推定、と一致するものなれども、他に之に類する用例なく、又本居氏の引かれたる例は、皆契沖氏のものにして、本居氏の解に合致するものにあらず、されば此の混亂は中古輸入の際に起りしかと思はるれど、其の證を得ず、又或は支那の呼法の變遷して後、名實一致するに至りしかとも思はるれど、こは餘りに奇矯の論法たるを免れず、今は唯疑を存して後哲を待たんのみ。

次に注意すべきは、アクセントは勿論支那の四聲國語の調に至るまで、高低を以て解せんとするは一般の弊にして、早く世に出でたる山田美妙氏の音階比較説、及島村抱月氏の律格抑揚説は極置き、が多い機に思ふに云ひつゝ、同書に

西洋人のアクセントと日本人のアクセントとを比較して見ると、西洋人の樂譜でいへば、²から¹に移る差がある云々、

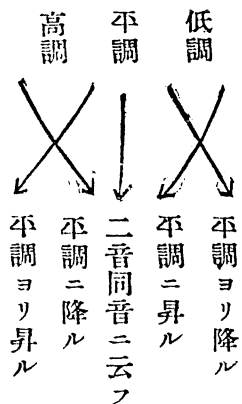
と述べられたり、こは聲音の大小を表すべき形式が、樂譜の他に廣く行はれつゝあるものなきより、止むを得ざるに出でしならむも、世の弊習を改むる爲には、何か他の方法を採られなば、更に効果の大なるものありしならん、但し¹²³の稱を高低と見ずして、發音力の大小に借用すれば、彼の深淺は²¹の差別に當り、此の四聲に重念を加ふるときは、³なる量をも顯はす場合ありて、

頓てアクセントを用ゐる洋語と、重念を用ゐる清語と、其の歸着點を均しくすることを知らるなり。支那の四聲は上述の如く清漢の二様あれども、清語の下平及び漢語の入聲は、共に氣道閉を用ゐるものにして、元より之を音樂の律に配當すること能はず、他の三聲と雖ども、上聲には屈曲あり、去聲は漸衰にして、平聲は之等に對して持久的なり、英人が漸衰聲の上にアクセントを加味し、以て律格の區分に類すとせるは、原質に大小と高低との差こそあれ、遠觀的分類としては何等の矛盾なし、然るに平上去の三別は之に反し、發音力の増減にあらずして其の傾斜屈曲にあるなり、茲に於てか律階説は變じて方向説となる。

方向説の最とも密なるは宮本準龍氏の六聲發揮なり、同書に曰く、
調子ヲ以テ詞ヲ分ツコトアリ、假令ハ、平調ノ音ヲ常トシテ二音同音ニイフは一ツ、平調ヨリ昇ルは一ツ、平調ニ降ルは一ツ、平調ヨリ降ルは一ツ、平調ニ昇ルは一ツ、凡テ此五ツ也、

京師ノ人、同名ノ品三ツニ分ケイフモ是ニ當ル、田舎ノ人ハ、詞ノ調子定マラスシテ、是ヲ分チ難シ、

今此の文の圖解を作れば左の如し、



此の中「二音同音」を平聲とし、「平調ヨリ昇ル」を上聲とし、「平調ヨリ降ル」を去聲と見るを以て、最とも普通なる解説とす、然るに本邦古來の國學者は、英人と同觀念を懷きしもの、如く「平調ヨリ降ル」ものを平聲とし、其の「二音同音」ものを上聲とし、遂に屈曲あるものを探て、之に去聲なる名を配するに至れり、若し又二音同音を平とし、降るものを去と稱へなば、上聲には屈曲あるものを配せざるべからざるに至るべし、斯くては上聲の解に副はざるを以て、再び迷宮に入るなり、茲に於てか文雄氏一派は、平聲の二音同音たるべきを知りて、之を平聲と稱へたるも、上去の二類を明確に判別すること能はずして、遂に古例に據りしにはあらざるか、要するに私言に云へる先淺後深なるものは、「平調ヨリ昇ル」ものなるべきに、古今之を上聲に配することなかりしは何ぞや、之を全く「先淺後深に屬する國語には屈曲ありて、語尾漸升にあらざる」に因り、之を敢てせざりしと云ふの外なし、古人聲と音を數かん、方向説亦四聲の解に適合せず、論歩聲に再考して三聲説とす。

自然界の聲音には持久あり、漸衰あり、之を樂器に譬ふれば、吹笛摩弦の聲は持久にして、匏土を撃つ音は漸衰なり、されど之等の聲音は、一音節の長さに於ては屈曲閉道の事あることなし、此の持久漸衰を惣稱して盛衰と名く、然るに人類の聲音には、盛衰屈曲閉道の三機能具はれり、之を人聲の三能と稱す、此の三能を以て支那の四聲を説くときは左の如くにして、律階説方向説の不可なることは一目瞭然たるべし。

清語	漢語	垂直圖	盛衰	屈曲	氣道
上平	平聲	□	持久		開放
下平		□	持久		聲帶閉
上聲	上聲	□	前盛後漸衰	曲衰	開放
去聲	去聲	▽	漸衰		開放
	入聲	▽	漸衰		唇或ハ舌等ヲ閉ツ

此の三能を認むるときは、以上五種の外更に諸種の聲調あることを知るを得べく、又短音及び國語の調をも解くを得ん、因て次回に於ては之等の事を述べんとす。

終りに一言すべきは詩家の平仄なり、支那に於ては詩歌は勿論文章の爲にも、古くより之を論せしこと見ゆれど、未だ其の眞價を明にするに至らず、之に關し無相文雄氏が磨光韻鏡後編指要録に於て述べられたる文は、漢語の四聲の條に引ける所の如し、之に依るときは、上記四聲の解と一致して、清語の上平又は漢語の平聲が、四聲中最とも醇なるものなることを知ると雖ども、其の朗讀吟嘯上に於ける効果に就て細説するを得ざるを憾とす、江湖の君の示教を賜はらば幸甚。

語調原理序論 (第三回)

(三八)

井 上 奥 本

四の一 國語の音素

國語の聲調を論せんとせば、先づ其發音を説かざるべからず、然るに本編の目的は聲調にあるを以て、之に關せざる限りは其概略に止め、以て論歩を早めんとす、因て今は主として普通國語に顯はるゝものを表示し、他國語の發音にして其空位を埋むるに適するものは之を採て、以て經緯の因る所を明にせり、又國語にして邦人の常用にあらざるものを擧げたるも同義にして、殊に「ア」行は聲調論上重要なものなり、故に本段に述ぶる所は、外國語は勿論國語に就ても、補足を要するもの少からずと雖ども、其の體制に至つては決して一系を亂すべからざるものなり。

發音に直拗の別あり、長短の差あり、長短は下文に之を論すべく、拗音は國語に於ては後世の發達にして、英語には古來稍之を難へ、支那語に至りては全く固有のものゝ如しと雖ども、直拗の別の爲に語調上の差を起すことなきを以て之を略す、若下文に至りて拗音の例語を用ゐることありとも讀者は之に疑を抱くの要なかるべし。

今諸家の説を參照して國語の音素と統合すれば左の如し。

音素表					
聲帶	舌本	舌腹	舌頭	舌尖	兩唇
カ	タ	ダ	パ	ラ	バ
ク	ツ	ヅ	プ		
ガ	ダ	バ	不成立		
グ	ヅ	ヅ	ハ		
カ	タ	ダ	サ		
ク	ツ	ヅ	ハ		
ガ	ダ	バ	不成立		
グ	ヅ	ヅ	ハ		
カ	タ	ダ	サ		
ク	ツ	ヅ	ハ		
ガ	ダ	バ	不成立		
グ	ヅ	ヅ	ハ		
カ	タ	ダ	サ		
ク	ツ	ヅ	ハ		
ガ	ダ	バ	不成立		
グ	ヅ	ヅ	ハ		

現今我邦には音素を表する文字なきを以て、假に熟音假字を用ゐ、又英字母は其の呼法に依り、呼例なきは空位を存せり、以下此表に就き少しく解説を試みんとす。

- (一) 作用欄中「塞鼻口腔壓開音」とは、気流の鼻腔に逃るゝことなく、唯口腔に向ひつゝ、聲帶又は舌唇の爲に氣道を閉止せられ、氣流を以て之を壓開するとき生ずる音なり、其次の恒開音は始めより少しく氣道を開けるものにして、全く閉止せらるゝにあらず、又開放にもあらざるなり、故に此音は擦音とも稱せられて、氣流の局部を擦過するを表せり。
- (二) 同欄中「通鼻口腔壓開音」とは、始め氣流は鼻腔に通ずるも、口腔の氣道は閉止せられ、後に至りて壓開せらるゝものなり、故に略して鼻音と稱することあり。

(三) 始めより聲帶の振動を伴ふものを濁音と名け、其の伴はざるものを清音と稱す、故に清音にして聲帶の振動を具したるは、既に熟音となりたるなり。

(四) 働器とは音素の生ずる主要局部の稱なり、以下之に就きて少しく述べんとす。

(五) 從來の聲音學書、皆聲帶音なる目を設くることなく、唯ハ行のみを喉音と名づけて擧ぐるを常とす、所謂父音表(子音表とも云ふ)としては、此事元より不可ならざれども、一般言語の音素表には、所謂母音をも擧げざれば完しと云ふべからず、殊にア行の壓開音なるア行は、カ行タ行と同地位に立ち、聲帶の壓開を以て成るものなれば、必ず聲帶音の目無かるべからず、之に對してア行は聲帶恒開の音たるなり、然るに此の二者の中間なる壓開濁音の成立せざるは、ガ行バ行等が舌唇の作用と聲帶の振動と各別同時に成立するを得るに對し、聲帶のみにては壓開と振動との一體兩用を爲し得ざるにあり。ハ行の中のフを兩唇音なりと云ふ人あれども謂れなし、鳥に似たる蝙蝠必ずしも鳥にあらず、兩唇音のフは、一般唇音の例に従ひ唇の外轉作用ありて、フには其事なし、若英人の呼法に於て、PHUに此作用なくば、英人亦誤れるなり、尙ほ兩唇音の條を見合はすべし。

(六) 舌本音舌腹音舌頭音は殆んど明にして、CHは獨乙語の語尾に多く顯はるゝもの、又乙は恒開音ザ行ザ行は壓開音なることに留意すべし、世人の普通に用ゐるチツはジズにして、ヂヅ又ジズに均しきなり、此の他TH DHは舌の前齒に觸るゝ點に於て、純舌頭音と少差あり。舌尖音なるフ行が壓開音にして、恒開音なるル行と對立すべきものなることは既に述べた。

(七) ア行はフ行の清音にして、其成立可能なるのみならず、山陰北國地方に於ては同々耳にする所のものなり、遠藤隆吉氏の「視話音字發音學」に、琉球音に就て云へる所のもの或は此ならんか、而かも「ドロの中間」とあるを見れば、こは濁音なるが如し、然るに本表中のテ行は全く清音にして、Tに尤も近似し、人によりてはタテト等の音に代用せらるゝことあるものなり。

(八) 兩唇音とは、英語の唇齒音なるド・V等に區別する爲に設けたる名稱にして、「バ」はフの新字なり、扱バ行フ行のウ韻のものをフウと呼ぶは誤まりにして、各唇の外轉作用を伴はざるべからず、故に本編にはフウに更ふるにフ子を以てせり、此呼法は可能且つ容易にして、又實に統一的なり。次にフ行は、ヤ行と均しく拗音と稱せらるゝを常とすれども、實は然らずして、眞に拗音と稱すべきはヤ行のみなるべし、從つて彼のクツツ等は父音の複合に因り、ヤ行及キャチャ等は母音の融合に基づくものと見るなり、支那の古韻書たる「韻鏡」其他に、ヤ行の拗直は等級を以て顯はし、ワ行との複合は別圖を立てゝ示せるも故あることなるべし。

以上を通覽するときは、此等の音素に共通なる、何等かの最單音素あるべきを思ふに至るべし、邦語に於ては此の原音素を分つて三とするを得、促音撥音及原母音是なり。

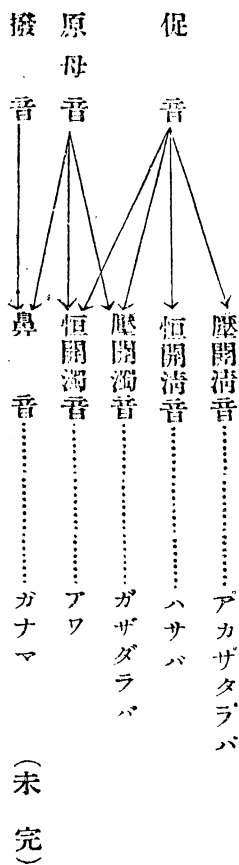
促音とは鼻音の諸音素に先具し、氣流の促迫する場合を一括せる稱にして、塞鼻音中の壓開清音に著しく、恒開清音之に亞ぎ、壓開恒開の濁音には漸次微なり、此促迫が鼻音に先具せざるは、鼻腔

は恒開にしてカナマ等の行の音を生ずるに當り、気流の壓迫を生ぜざるに因る、故に鼻音を壓閉音と稱するは、稍其當を缺けども、舌唇を開閉する形式が、塞鼻壓閉音と全然同一なるを以て、假りに此名を冠せり。從來の記法に於ては、此促音が語幹若くは語尾に顯はるゝ場合を表するに、ツ又は其小形なるものを以てせり、然るに近頃種々の理由の下に、之を改めんとする人多し、例之ば某氏は、イバンイッタン等には小形のツを用ゐ、イサンザシ等には小形のヌを用ゐるべしと定め、此中のツは中止音にして、其ヌは促音なりとし、此二種に限られたり、又他の某氏は、促音に四種ありとし、コッカセッサッタラッパ等の例語を擧げられたり、此等の諸氏はアッハッハッなる笑聲、フリードリッヒなる人名、アッラメデタヤなる文句等に、國語的呼法に於て顯はれたるツを、如何に改めんとせらるゝにか、若又速歩に通過するを見て、サッササッと形容し、汽管より切れ々に出づる蒸気を見て、パッパッパッと記さるゝの意にや、斯くてはサとサッ及びパとパッは、同質異音の記法となりて、邦人には大いに異様の感を起さしむべし、又假りにサッササハッハッハと記するものと定めんか、是れスズメのズとツヅミのヅとは相換ふべからずと爲すの類にして、語源上の理由或は記法上の便宜ありとするも、寫音の眞諦には合せざるなり、何とならば、促音は次に來る音によりて其眞價定まるとするは、此等の人の定義なるに、語尾なる促音には後屬音なきを以て、其音質定まらざる等なり、勿論語尾なりとも、促音なる以上は、何等か気流を壓迫するの器關無かるべからざれども、之を二三に限るは不可にして、聲帶及び舌唇の各部は、其部分毎に各別なる促音を作るとし、現行の記法に從はば國語をヨキキ學校をガゴと記する小學生あるも、決して寫音を誤まれるにはあらざるなり、若し洋字記法に泥み、又は後屬音に迎合して、ザシコッキ等と記せんとするも、アッハッハの如くツに代ふる適字無き場合あるべく、又ザシと記するも、語源に合せるにても無く、終に其煩に堪へざるべし、只小形のツは、普通のツと同書なるを以て、不可なりとせば、ン字に倣ひて、前に一字を製定すべきのみ。

撥音は聲帶音が鼻腔に反響するより生じて、邦語の語幹語尾には多く用ゐられ、稀には語首にも用ゐらるゝものにして、カナマ行の發音に先具せるもの亦是なり、其單獨の場合を表すには通常ンを以てす、此撥音亦異説少からず、某氏が之をNMに二分すべしとせらるゝは、カントンなど物音を形容する時に於ても、氏は必ずナマ行の初發の如く、舌頭又は唇を以て気道を閉ぢらるゝにや、吾人は少しも其要なく、又其事なしと信ず、彼の某氏の「清語會話」に、堂をタン(ang)壇をタヌ(eu)と定めて、ンをngに配せられたるも、亦ンの意義の廣さを證するものにあらずや、但し世にはナムトナラバトムネル等と記するを常とする人あれば、人に因りては、特殊の習癖に固定せる呼法を用ゐるもあるべし。又他の某氏がカンナのンは舌頭に、インシのンは舌上に、ラッカンのグは舌本に、サビキのムは唇に據るとし、總てを四種に分たれたるは、尙ほ窮窟にはあらずや、爲に氏は犬の吼聲を形容するに當り、ワグワグワンなる記法を探らるゝに至れり、然るに此語尾のンには後屬音なきを以て、從て之をグともンとも定むべからず、強て定めんとせば、喉音に近きグこそ適當ならめ、然るを特にンを用ゐられたるは、カンナのンに據られしか、或はインシのンに據られしか

されども吾人が呼ぶ所の語尾のンには、必ずしも舌唇等の憑據を要せざること、物音カントンの項に述ぶるが如し、或はンマ(馬)ンメ(梅)ンバ(姥)ンベ(宜)等の類のみ、古來の國語に存するを以てンはMの義に統一すべしといふ人あらむも、現今に於ては、ンナルホト又はンンキダナーなどの語あるを如何にせん、又或は從來「にばね」「みばね」の説ありて、ンはニの變形、んはにの變形なりとすとも、現時のンをNに統合せんことの不可なるは勿論なり。要するに、ギンナン(銀杏)をギンアンと呼ぶも、インネン(因縁)をインエンと呼ぶも、大なる困難あるにあらず、キダチ(木刀)をキダチと呼び、カタスミ(堅炭)をカタズミと唱ふると均しく、前屬の母音鼻音等に引かれて、遂に易きに就けるのみ、我邦の古語の語首に、ガザダラバ五行の濁音なくして、其第二音以下に多きは、是亦前屬音の母音に引かれて、易きに從へるのみ、故にアサ(朝)對アザ(瘧)もフタ(蓋)對フダ(札)も兩立し得るなり。以上の理に因り、ケンエツ(檢閱)テンハイ(天盃)等と呼ばば、前記の諸氏は、何等の字を以て此ン字に換へんとせらるべきか、畢竟ンんが何等の文字より轉移し來れるにもせよ、現今に於ては、此字は鼻腔に反響する濁音を表せるものとして、促音としてのツと對等の地位に置くべきものなり、決して洋字記法に泥み、又は後屬音に迎合するを要せず、只ンは、ツの如く同字を二様に用ゐるにあらざるを以て、新字を造るを要せざるのみ、故に文章中にナンナトラバとあるも、戸籍帳に「んめ」なる婦女名見ゆるも、不合理にはあらず、只ナムトナラバ「ぬめ」等とあるときは、寫音にも語源にも合せざるに過ぎざるなり。

等を折長音と稱するに對し、ケレ、サレ等を稱すの語尾に於ては單行する此長音尾なるは、多きは「」を以て表せられ、稀には小形のア行字をも用ゐらる。此「」の應用は、近時大いに發展して、粗々をアラアラ、敷居をシキ、救をスク、伊勢蝦をイセエビ、燭をホノ等と記する人あるに至れり、殊にローマ字記法に於ては、此理を應用せるもの多し、此等の中、熟語は語源に注意して矯正すべく、「前へ」「物を」等は、マエーモノ等と誤まらるゝの虞なしと雖ども、惡をアシー、遅をオソー等とし、又救をスク、思をオモ等と記するは可なるか、或はアシイ オッオスクウ オモオ等と併用すべきかは、一の疑問なるべし、又從來の國語辭書に、寫音的の振假字を施すに當り、肩をオシギ、今日をキヨウ等とし、オーギ オオギ又はキョーキョオ等と記せるものなきは、古來の慣例に據れるものならんも、不可なるべし。但し祝をイワウ、洗をアラウ等と記せるは、國民大部分の發音の實際にも合し、勸詞活用 of 舊則にも適すれば、後者は獎勵すべきものならん。以上の三音は、各種の音頭に先具せる點より、之を三先音と稱す、又略して先音ともいふ、其關係を表示すれば左の如し。



本論第一回分正誤

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
五五	一五	、簡にして	簡にして、	同	一三	一各	一、各
五六	六	法にな	法に至	六一	六	『	削る
同	八	らず	らず、	同	一〇	ものである。	次へ續く
五七	一六	的	的に	六三	七	ナレリ	ナレリ、
五九	四	云う	云ふ	六四	一三	ものなり	なり
六〇	六	り。	り、	六五	一二	活字不明	e
六〇	一〇	なる	なる。	六五	九	る	る
同	一一	假名字	假字				
同 第二回分正誤							
頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
三九	一一	官語	官話	同	一〇	橋	橋
同	同	末尾	『チ加フ	同	末	訛	訛
四二	六	記憶	記法	四九	一五	なり	あり
四三	一	ナニツ	ナニツ	五〇	一七	(二行増)	削る
四五	六	北漢	此漢	五四	末行尾	『を加ふ	君子
四六	一六	中	申	五五	末行	君の	
四七	六	上聲	之より大行				

語調原理序論 (第四回)

井上 奥本

四の二 國語の音幹及び短音

各種の音素中には、犬猫を招くに唱ふるテョッテョッの如く、又之を追ふに用ゐるシ、の如く、聲帶音を含まずして語を成すものあれども、國語の普通の發音には、皆音素に原母音を加へて用ゐるなり、此場合の原母音を單に母音を稱し、音素に母音の加はりたるものを熟音と稱す、而して母音を加ふると同時に成立せる、顎の開度及唇の開度形狀に因り、其母音は五種に分かる、アイウエオ是なり、故に母音は、聲帶音中の恒開濁音なるア行と同一なり、例之ば着色せるを青紙黃紙と呼び、其の素地を紙と稱すれども、始めより着色せざるもの、亦紙たるは勿論なり、此母音短きときは、其の熟音を短音と稱し、唯各國民の慣習により、其母音の種類に従て、短音の種類を定むれば可なれども、母音の長さものに關しては、解説稍區々なり、因て先づ短音を解し、次に長音幹に及ぶべし。發音の長短は言語の尺度にして、語調に關することも亦甚だ大なり、然るに此の長短對立せるは、悉曇字のみにして、彼は母音の字畫に其別を具備し、些の曖昧の點なく、其の他の清漢英等の語には、事實上短音あるが如きも、界域判然たらざるもの多し。

今英の獨立語にして、短音なるものを求むるに、

A (a) 或 (冠詞)

Ed (e) 疑ヒ又は驚キを表する聲

The (T-be) 此、

The (T-he) 此

(四)

等の外殆んど稀なり、上記の數語も、^四の他は弱母音（獨立の單音節に強弱の別ある件に就ては、別に説あり、）の語のみにして、實は皆依立のものなり、従つて英語には純短音なしと云ふも可なり。次に清語の長短を見るに、是亦「今兒」^{ディル}「明兒」^{ミレ}の「兒」、^五「甚麼」^{シエマ}「怎麼」^{ザンモ}の「麼」^モ等に類する虛字助字の外、獨立なる短音なし。

然らば漢語は如何といふに、邦人は普通には漢字音に長短ありとせるも、短音なるが如き字に、

𧈧 己抄父(コ才反)

西大寺藏金光明最勝王經

蛆螫
ソオシヤク

石山寺藏成唯識論

都
チイ

石山寺藏高僧傳

威
イ非

上加茂神社藏古文孝經

等と長音の如く古書に記せる例少からず、又類聚名義抄に於ては、

ガ
ア
我

サ
ア
坐

シイ
時

チ
イ
智

・ビ
イ
内比

ボ才
暴

ケ工 尋(磚)

等の音釋あり、殊に支那撰述の「悉曇字記」には、

短阿字

上聲短呼音近惡引

長阿字

依聲長呼

短伊字

上聲聲近於翼反

長伊字

依字長呼

最も短音に近きが故に、之を借りて悉曇の短音を表したるや明なり。之を以て思ふに、吳音には
 始めよりア|イ|ウ|エ|オ 各短韻の語ありしならんも、漢音にて現今短韻と見ゆるア|イ|ウ|オは、
 各ア|イー|ウ|オーにして、エイ|アイ|ウイ|及び|イウ|エツ|アツ|オウと合して、十一韻な
 りしなるべし、而して現今 ウ の韻に呼べる「空、通、數」等は、其當時 ク ツ ケ ス にして、
ウ なる長音の類にあらざるを以て、現今の ツ 韻の原形なる ウ 韻と、紛ることあらざりしな
 り、されば漢語の長音を後世短呼すること、なりしは、吳音と國語との影響にして、吳は南國なれ
 ば、印度と其風氣相近く、隨て發音亦相似たる所ありしものならんか。
 次に國語の長短を見るに、古書には

蚊 蚋

二字加安

小川爲次郎氏の新釋大方廣佛華嚴經音義

蚊
加
阿

金光明最勝王經音義

幅
ヤ
ア

類聚名義抄

等あれども、現今短音とせるものを、長音の如く記せる例甚だ少く、却て類聚名義抄には、「嗚呼、鳥寧、慶、於戲」が、四語各別の部門に載れるにも拘はらず、皆單に「ア」と注せられ、「湏、注、囚」は、何れも「シユ」と注せられたり、因て古代國語の一音單語は、長音なりしか將短音なりしか甚定め難し、併し乍ら長音は原始的にして、京阪附近に於ては「木、火、子、目」等を、皆長音に「キーヒューマー」等と呼び、此等に助辭を附したるときも、キーラヒーノコーニマーガ等と唱ふるを

表 幹 音 長

幹首 / 幹尾					
イ	エ	ア	オ	ウ	
イ	エ	ア	オ	ウ	
イ	エ	ア	オ	ウ	
イ	エ	ア	オ	ウ	
イ	エ	ア	オ	ウ	
イ	エ	ア	オ	ウ	

此等の中、イーエーアーオーウーの五音を直長音と稱し、其他の二十を折長音と稱す、直長音の一音なることは尤とも明瞭なれども、折長音に於ては、將して長音なりや二重音なりや、或は二音節なりやに關し、時に異説あり、岡倉由三郎氏は其著「英語發音學大綱」に於て、

(一)英語では $\hat{a}$ (普通記號 $\hat{a}$) と $\hat{o}$ (或は $\hat{e}$) と $\hat{i}$ (或は $\hat{e}$) の外は所謂「長母音」といふものが其の實は二重音であるが、日本語の母音は皆長く引き伸べることが出来る。

(二)一つの二重音を構成する二つの母音が、たゞ舌の上りの高低か又は合口の度かの一方でのみ違ふもので、其の他の點から見ては同じ性質の母音である場合には、之を「半二重音」といふ。英語には、 $\hat{e}$ (或は $\hat{e}$) (或は $\hat{e}$) (或は $\hat{e}$) (或は $\hat{e}$) の四個の半がある。

(三)全二重音は半二重音と違つて、其の成分たる二つの音が前半と後半と全く別々の音で成り立つ

る。しかし是等の二重音を、其の成分に一々正しく分解して、各の舌唇の位置を確定するものは容易な業でない。随つて、有名な發音學者の間にも全二重音の性質の細い點に至つては、説が十分に一定して居らぬ。

等といへり、之に依るときは、英語の長音は、長音・半二重音・全二重音の三種に分かれ、國語の直長音に均しきものは、アー (或は $\hat{a}$) オー (或は $\hat{o}$) エー (或は $\hat{e}$) (此のアーは直長なれども、國語のアーと多少差ありて、曲るか) (此のオーは直長なれども、國語のオーと多少差ありて、曲るか) にして、イー (或は $\hat{i}$) ウー (或は $\hat{u}$) (此のイー・ウーも國語のもの) エイ (或は $\hat{e}$) オウ (或は $\hat{o}$) を之に亞ぐものとし、アイ (或は $\hat{a}$) アウ (或は $\hat{a}$) オイ (或は $\hat{o}$) に至りては、全く一音節と二音節との中間物なりと見たるなり、然るに漢語に、エイ アイ ウイ あり、イウ エウ アウ オウ あり、清語亦 エイ アイ オイ ウイ 及び イウ アウ オウ ありて、漢語の エウ は清語に於ては ヤオ (要・表等) に傾き、其 アウ は アオ (好・包等) に傾けり、其他尙清語には イエ (夜・別等) イオ (約・角等) ウオ (過・活等) の類ありといふ、元より英語の $\hat{e}$ $\hat{o}$ $\hat{i}$ $\hat{u}$ 等は一般世人に長音と稱せらるゝものにして、漢清語の長音節を成せる語幹 (前記の) も、亦長音節ならざるべからず。若又國語に於ても、セイ (丈) を「背の長音」と注し、セイ (石華) を「セの延」とし、寫音假字の場合に、扇を オウギ、今日を キヨウ と記して、怪しまざるの例より見れば、直長音の他は、只 エイ オウ のみ長音と稱すべく、随つて英の全二重音は、長音以外に立つべきもの、如く見ゆれども、支那語殊に清語に對照するときは、單に然りといふことを得ざるなり。

抑音節は、聲帶振動の繼續時間に基き、長音或は短音と稱す、國語の クウ (食) スウ (吸)、又は

其字音のクウキ(空氣) ヌスウ(戸數)等と雖ども、ク・ウ・ス・ウと二音節に發音すといふは、クの母音なるウ及びスの母音なるウの聲帶振動は、各其音尾のウの聲帶振動と絶縁せるなり、然るに直長音は勿論、エオイア等前表内のものは、皆其の振動を繼續せるなり、従つてクイ(悔) フェ(笛) テン(天) 等より、トガ(答) カド(角) 等に至る迄、苟くも尾字の音韻に促音性を具へざる語は、皆長音として發音することを得べし、然るに常に、母音以外の語尾を有するものを疎外するは、母音呼法以上の新元素入り來りて、發音器關の用法、大に複雑となるを以てなり、而して母音尾以内の長音に於ては、直長音は少しも器關を移動せず、聲帶振動を繼續するのみに止まるも、夫れ以外のものに何故に、長音なるか二重者なるかの疑問を生ずるかといふに、是亦器關作用追加の單複に因し、殊に單なる閉顎作用を以て、最も純なりとするものゝ如し、そは日英の兩語に於て、エーをエイに、オーをオウに移すの僻あるを見て知るべし、殊に此の二者は、發音の終止と共に默時の口形に復せんとするの順序を取るものなれば、一層行はれ易きなるべし、されども梵語には、ア韻を語尾とする語多くして、日英にイウ音尾の長音多きは、熱帶國と然らざるとより起る、生理上の氣息呼吸に因するものならんも計り難ければ、エイオウのみを、最簡單なるものとも定め難かるべし、而して器關作用の單複や、異因同果の理法を伴ひ、其説明甚しく煩瑣に陥るべし、故に岡倉氏は同書に於て、

(前略)唇を圓めることは舌を縮めるのと全く同じ結果を生ずるので云々。

アエに於ては顎はア型の全開の儘にして、舌の前進を生ずべし、更に又エイは唇形不變にして、只閉顎を要し、アイは唇形不變の外に、閉顎と舌の前進とを要とするも、オウは只閉顎の唯一變化に成り、アウ亦唇顎一體として閉合するに過ぎざるにあらずや、されば西人が、アイアウオイの解説に至つて、窮せるも宜なりとす、故に始より此區別を設けざるに若かず。思ふに強て此區別を設けんとしたるは、エイオウ字母アと〇とは、其呼法元來 エーオーなりしを、後世 エイ オウと轉呼しつゝも、猶舊來の直觀より、此字の名を直長音と信じ、此エイオウを他のアイアウオイと分離せんとして半二重音等の目を起せしなるべし、エイオウと其他のものと繁簡の程度さへ、劃然判別し得るものにあらざるなり、之を要するに、アイアウ等が二重音と稱すべくば、エンは撥二重音、ウツは促二重音なるべきか。元よりアーオーが長音と稱さるれば、アイオウは夫れより屈折したるものと見て、之を折長音とも稱すべけれども、二重音なる名稱は原書の直譯なるにもせよ、二音節なる語とも類似し、甚だ不可なり。然るに國語調査委員會編輯の「音韻調査報告書」に出でたる問題には、「二重音」なる名詞なきにも拘はらず、其の附圖にのみ、長音・二音に對向して「二重音」なる名目を用ゐられたるは何故にや、更に再考を要する件なるべし

四の三 國語の音尾

國語の音尾も亦、一般音素に共通なる最單音素と均しく三種に分るゝものにして、之を三從音又は

單に従音と稱す、母音尾撥音尾促音尾即ち是にして、其文字は元より「ー」「ン」「ツ」なり。母音尾を有するは、前段に述べたる直長音にして、此意義より、母音尾を長音尾とも稱す、故に此音尾は、折長音に關せずと知るべし、邦人が、エイアイウイ及びイツエウアウオウ等を、一音なりと云はんとするは、漢英の語に慣れたるよりの迷想にして、邦語の本性にあらず、さればこそ英語に於ても、識者は直長音以外のものに、半二重音、全二重音等の稱を設くるなれ、編者が今回折長音と命名したるも、元より漢英の語との對照上の便宜より起りたることにて、此の名は、純長音より少變したるものゝ義なれど、二重音なる稱は、更に二音節の義に近きを見るべし。殊に支英の語は、短音を第二位に置き、直長音折長音の類を以て、主たる音節と見れども、邦語に於ては、節の「主たる單位」は短音にして、直長音、撥長音、促長音等さへ、比較的特殊のものと見るべきなれば、折長音の如きは、他の二音節の語と同等の地位に置くを以て、至當とするなり。

撥音尾は、音素の條に述べたる如く、國語に於ては數種を設くるを要せず、之に對して、漢には唇内(ㄣ)舌内(ㄥ)喉内(ㄞ)の外ありて、英又之に均しく、清語には寬音(ㄣ)尾音(ㄣ)窄音(ㄣ)の稱あり。國語の語首語幹に顯はるゝ撥音にも、時に之を應用することを得るものあれども、又適せざる場合あり、委しくは彼の音素の條を見るべし。

促音尾は、漢に唇内(ㄣ)舌内(ㄥ)喉内(ㄞ)ありて、英のものは之よりも其の種別多けれども、國語の語幹語尾に顯はるゝものとは、稍其の質を異にし、英の語幹に顯はるゝもののみ、國語の語幹に顯はるゝものとは、前項の撥音尾と共に、音素の條を伺ひ、又聲帶閉に關する各條を參照すべし。茲に至つて思ふに、彼の悉曇字母に、短音以外に含める筆畫は、長音及び空點(撥音尾)涅槃點(又の名炎點)(促音尾)の三種に限れるも、亦長音に折長音を含まず、空點に三種を分たす、炎點に數種の別なき點も、共に國語に均しきは、實に奇と云ふの外なし。

次に注意すべきは、一般の促音尾と「ㄱ」行の先具音たる促音との關係なり、之に就ては既に短音の條に述べたる所もあれど、更に一言すべし。此聲帶促音は、直・折兩長音尾及び撥長音尾に起ることを得れども、普通の促音尾には伴はざるが如し、之に就て思ひ起すは「アクセント」の條に引ける遠藤隆吉氏の、

支那の言語學者の所謂調子なる語は其含む所甚だ廣し。適當に言へば調子ならざるものまで其内に包含せしむ。例へば聲門を急鎖して母韻を止めたる如きも亦音調の内に算へらる。

といへるものは、實に此の場合に合致せるものにして、全し清語の下平を指せるものなるを知るべく、從て國語にも此呼法の存するを見る、是れ即ち促音尾の特例なる斷聲尾なり、果して然らば、英語の所謂父音尾のものと、漢語の入聲と、國語の促音尾との間には、何等の區別なきかと云ふに、同氏は英語に關して同書に、

閉音例へば「ㄷ」の如きは其密閉せる部分を放發せざるべからず。若し放發せざるときは何等の聞き得べきものなきなり(中略)之を放發するには單に口中にある氣息を以てすべし。肺中の氣息を用ふべからず云々。

と云へり、漢語の入聲亦之に一致せざるべからず、然るに我邦古人の入聲を解せるものに、筆法の筆、惡口アツコウの惡コウの如し等とせるは、今人も初學に於ては、陷り易き所にして、實驗を待て甫めて知り得るなり、之に對して邦語の促音尾は、實に筆法の筆、惡口アツコウの惡コウの如くにして、其の促法は發音者自身には其の努力を自覺するも、他人には、*Pt* の區別を迄聞き取ることは能はず、隨つて之を記する文字にも區別を要せざるなり、英語は之に反して、單音節のとき此の音尾を明瞭ならしむる習慣なるより、語幹に位する爲其の質異なる促音にも、唯一の文字に依らずして、*pts* 等を區別するの記法を生じたるならん、而して其の語幹のものは、國語の語尾なる促音と同一呼法なるなり。

(五二)

長音尾表

音類		圖名	日	漢	清	英
直長音 (折長音)	放聲	コー(斯く)	智 チ	該 ガイ	媽 マ	咳 カ
	斷聲	ソー(然か)	無	麻 マ	孫 ソン	無
撥長音	放聲	セン(爲ぬ)	剛 カウ	干 カン	甘 カン	Tang, Tan, Ran
	斷聲	ウン(唯)	無	堂 タウ	頂 テイ	無
促長音	放氣	マス(座す)	各 カク	葛 カク	閣 カク	Kag, Rat, Rap
	斷氣	ヤツ(無聲)	無	無	無	無

氣、其放發を放氣と稱して、日漢清英の長音を分類すれば圖の如し。
此表は少しく注脚を要するを以て、左に列記す。

- (一)「折長音」は國語に於ては、二音節と見るを以て、此表に入らざれども、漢清英は然らざるにより、便宜上標記し、且つ其例を挙げたり。
- (二)「ソ」は疑を以て反問するとき、語尾に力を加ふる故、遂に斷聲する例なり。
- (三)「ウン」は應諾言としての此語が、問者の氣に入らざるとき、同言を以て反問する爲、語尾に力を入るゝにより、斷聲する如き場合の例なり。
- (四)「マス」は、アッマス等の語尾を簡略に發音する爲、*s* の母音なる *u* の消失したる如き例なり。
- (五)「ヤツ」の音尾は、多くは *h* となる、若し斷聲すれば短音なり。
- (六)漢音「智」は、短音の條に引ける類聚名義抄其他のものゝ内より採れるなり。
- (七)カウカスカム及びカクカツカフは、*ka* *ku* *ka* *ku* を音尾とするものにして、タンタスは *tan* の順序に音尾たるなり、但し清音には *an* 尾のものなし、又英語には表外のもの多けれども、國語に縁遠きは用なければ略せり。

爾來章を重ねて、國語の音素音幹音尾の要件略ぼ挙げ終りたれば、發音に關しては暫く筆を止むべし。

語 調 原 理 序 論

井 上 奥 木

五の一 國語の調素及び其單位

曩に漢語の四聲の條に於て、長音二音國語の調に就て記する所ありしも、要は漢語の調を解するにありて、之に用ゐし短音單位の音符も「韻學私言」の説に依り、爲に垂直圖形と音符との一致を缺き、殊に去聲符（「」對○●）に於て齟齬の甚しかりしは、既に讀者の認めらるゝ所なるべし、實に此の去聲符こそ國語の聲調論上最も議論の存する點なり。元より英文の聲調を以て國語のその全體を推すべからざるは勿論にして、却て根本的に見解の相違せる點亦少からず、因て前段に説ける發音を基礎として、國語の調素及び其單位を記し、次に外國語との比較に及ばんとす。

抑聲調の要素は發音力の大小に因るものにして、其基礎を高低若くは強弱の一方に置くべきにあらざることは、前各條の所々に説けるが如し、故に國語の場合に於ても亦此定義を超ゆべからず、隨つて盛衰屈曲閉道の三機能亦備はれり、然るに最近に至りても神保格氏は雜誌「國語教育」の本年四月號に於て、オックスフォードのニューイングリッシュ、ブクシヨナリー中のアクセントの定義に、

一個の單語若くは連語の中に音節が澤山並んで居る時、其中の一個の音節が隣の音節に比べて特に目立つ事を云ふ。但其の目立つとは如何に發音せらるゝ爲に起つても構はない。

とありと云ひ乍ら、國語の爲に説を作して、

予の考へでは東京語のアクセントは高低アクセントであるといふ結論を有して居る。
關西(殊に大阪)の諸方言の中には單に高低のみならず、高低が有る外に尙強弱アクセントが加はつて居りはしないかと思はれる。

等と述べられたるは奇ならずや、元來普通の發音學書に於ては「父音は母音を俟つて始めて音節を作す」と云へるも、犬猫を招くに用ゐるチヨッチヨッ及び舌鼓のチヨッ(共に○に類す)、又は犬猫を追ひ或は演說最中に聴衆の談話するを制止するシ、(共に○に類す)等は、母音に關せずして一音の資格あること、既に「國語の音幹及び單音」の條に述べたるが如し、其他長音尾に用ゐる促音にも母音なけれども、此の促音にも大小の別を立つるを得て、二種の聲調の成立すべきは、漢語の條にも述べたる所なり、されば此等の音の大小は必しも母音に依て定まるにあらず、果して然らば此くの如く母音の副はざる(即ち聲帶振動に關せず)音の大小は強弱なるか將た高低なるか、彼俳優團十郎の語調は強弱に依り、菊五郎の語調は高低に因すとするも、兩者に共通なる要素及び夫れ以外の現象を不問に附すべきか、斯の如きは彼の文字學者が表音文字は字數多くして表意文字よりも流布不便なるを見て、文字は事件の傳達器にして、聲音の傳達器にあらずるを忘れ、表音文字に隨喜して、寫音を究竟の目的なりと信じ、文字の天職を誤解すると一般ならずや、元より人に因り地方に因りて、或は高低に傾き、或は強弱に傾むくべく、又時宜に依り、感情の優れるもの(誦讀哀訴等)は高低を主とし、意思の優れるもの(命令叱咤等)は強弱に走るべきも、單に理性的の場合にありては、何れも無かりと云ふべきにあらず、高低強弱は發音力の強弛に隨ひ並行に進退すべく、その他

發音の副はざる音は、夫れ一局部の動作の強弱、又は呼吸の多少に因てその大小を成すなり、故に一般に聲音の大小は發音力の強弱に因るを以て、總ての聲調に「強弱」てふ熟字を用ゐるも可なるが如きも、斯くては音響學上の「高低に對する強弱」と相紛るる虞あるを以て、今は「大小」と稱することとせり。さればこそ從來の諸家は國語の調素を解して、高低にありとせらるゝもの多きも、アクセントの條に引ける高橋龍雄氏の説及び岡倉山三郎氏の「英語發音學大綱」に述ぶる所、又伊澤修二氏の「音勢」てふ名稱を以て國語の調を扱はれたる等、強弱說に近きもの亦少しとせざるなり。抑此の聲音の大小とは、一語中の各音節を比較し、又は一音節中の首尾を對照して、其の程度盛衰等を指摘するより起る區別にして、人若くは時を異にするものを比するにあらず、故に此の大小は絶對のものにあらずるなり、果して調素は發音力の大小に因すとするも、其の記載單位を如何に定むべきかは大なる疑問なり、元來國語は常に短音本位の觀念を以て記さるゝが故に、時に長音に屬する發音ありとも、之を短音の長さに切斷して、其の各部に短音に用ゐる所の聲符を施すを以て尤とも便なりとす、然のみならず、長音と稱するも、二重音と名くるも、又は二音と呼ぶも、共に發音力の連續せることは「長音幹」の條に説ける如くなれば、強て「エー(唯)エイ(英)は直長音と折長音なり、エン(宴)エミ(笑)は撥尾長音と二音節とにして、何れも聲帶振動を繼續せり、マチ(町)トキ(時)等は發音力のみ繼續せり」等と稱へて、各その聲調記號を區別するを要せず、且又自然界の聲音は長短常ならざれども、之を形容する所の國語は、短きは一短音、長きは二短音の長さに發音さるゝを常とし、之を引長するも此の單位を以て進み、如何なる場合にも端數時間を生ぜざるを以て原則

國語の聲調單位は右の三種に限る、茲に面倒なる一種の音あり、彼の短音の條に於ける「斷聲音」之なり、此音も普通の短音と並立する以上は、陰陽の兩聲を現するは自然にして、只俯聲と成ること能はず、そは一短音の時間内に於ては、斷聲と急衰とは兩立し得ざるを以てなり、然るに従來此音に相當する音字(假字)なきを以て、假りに之を聲調に例し別に聲符を定めんとす、元來斷聲音は聲門杜塞し隨つて聲氣の斷絶せるを意味するを以て之を杜聲と稱し、陰陽兩調を採り得る點より、陰杜聲、陽杜聲に分ち、其の聲符を「△」「▲」と定め、以て陰陽俯の三調と對立せしむることゝす、斯くすると、此音は俯聲と成り得ざるを以て、俯聲符と重複するの憂なく、又聲門杜塞は音尾に發音力緊張の氣味ありて、俯聲の急衰なると相對せるに近く、尙ほ符形の彼は下尖なるに、之は上尖なるは、體裁上にも筆記上にも不可なかるべし。抑此兩杜聲中、陽杜聲の例語は、平常電話に依て應接する場合へと呼ぶは承諾の義にして、へと呼ぶは傾聽又は「然り」の意を現はし、若し對者の語の聴取し難きときはへと呼ぶを常とするが如し、又陰杜聲は陰聲と均しく獨立聲ならざるを以て後に譲る。

便覽の爲め以上五聲を一處に集むれば左の如し、以て長音二音以上の語に應用するを得、因て

●陽聲

●陰聲

▼俯聲

▲陽杜聲

△陰杜聲

次に二音語に就て述べん。

茲に二音語と稱するは二短音より成れる語の義にして、一語中に長音を含むことなし、其陽聲の連陽俯聲と稱す、次に●▲を杜尾双陽聲、●△を杜尾陽陰聲と稱し、五調皆首音に陽聲にして尾音には單位聲の五調を用ゐる、此他「韻學私言」には○○即ち双淺あり、アクセント式には○●あれども皆編者の採らざる所なり、其理は順次後文に述べし。

以上五調の中兩杜尾聲を除き其他の例語を舉ぐれば、

以下東京調

以下京阪調

●●双陽聲

はた端

はな鼻

もち餅

はし端

つる釣

かき柿

●▼陽俯聲

はた旗

はな花

もち持

はし箸

つる鶴

かき蠟

●○陽陰聲

はた將

はな初

もち藕

はし橋

つる弦

かき垣

等の如くにして、二音語の首音は三調皆同程度の發音力を以て發音せらるゝは論する迄もなかるべく、其首尾同調なるは双陽聲にして、尾音の小音なるもの即ち裏聲の附屬せるは陽陰聲なり。

次に杜尾双陽聲とは、双陽聲たるべき二音語の尾音が、斷聲音たる場合を云ふなり、其例は彼の溫順に反問する場合に呼ぶナニ(何)の如し、若し此場合怒氣を含みて反問するときはナニとなるを常とす、之を杜尾陽陰聲と云ふ、此等●△▲の二調は語例少なきを以て通常の聲調統合には編入せざることゝす。

以上五調の中、陽俯聲はアクセント派に語尾にアクセントありと云はれ○●を以て表はさるゝものなれども、既に他の四調の首音皆陽聲にして、此調の首音亦同程度の發音力なる以上は、この語音にも亦●を用ゐざるべからず、隨つてその語尾には●を用ゐるべくもあらず、元來陽俯聲は其各音

を引長すれば $\square \nabla$ の形にして、其各形を短縮すれば、 $\square \nabla$ となるべし、故に $\bullet \nabla$ を以て之を表すれば何等の疑問起るべからず、然るにアクセント派が尾音にアクセントありといふは、英語のアクセントある音節は ∇ 形にして、その之なきは $\square$ 又は $\square$ の氣分に近きより、國語の發音中 ∇ 形のものに $\bullet$ を配し、 $\square$ 形若くは $\square$ 形のものには $\square$ を施すこと、定めたるならんか、(英語の平聲に双淺さの說亦之に類せり) 斯くて新式に「 $\bullet \bullet \bullet \bullet$ 」若くは「 $\bullet \bullet \bullet \bullet$ 」の如く聲符を施せる類の單語中に於て、 $\square$ 前に屬せる $\bullet$ を悉く ∇ に限るものと信じ、「 $\bullet \bullet \bullet \bullet$ 」を「 $\nabla \square \square \square$ 」と見、「 $\bullet \bullet \bullet \bullet$ 」を「 $\square \nabla \square \square$ 」と見るの意思を以て、「 $\bullet \bullet \bullet \bullet$ 」若くは「 $\bullet \bullet \bullet \bullet$ 」と使用せるものゝ如し、其不可なることは後文を讀まば更に明瞭なるべし、若又或東京人の如く陽聲に呼ぶべき語の語尾に於て斷聲せば、此れ既に此調にあらずして杜尾双陽聲となりたるなり。

前數條に述ぶる所は陽聲を首音とせるもののみにして、陰聲は語首に立つことなく、兩杜聲は斷聲するを以て後屬音なけれども、俯聲は語首にも立ち得るやの疑問起るべし、之に類するものは $\bullet \bullet \bullet \bullet$ にして、 $\nabla \bullet \bullet \bullet \bullet$ との相似より、アクセント派に於ても錯誤を生ぜしことは前條に述ぶるが如し、然るに國語に於ては二音語の引長は「 $\square \square \square \square$ 」にして「 $\nabla \square \square \square$ 」にあらず、隨つて其短縮に均しき「 $\square \square \square \square$ 」なる記號を用うべくもあらず、唯長音例へば物質音を示す「ブー」カンの如きは之を引長すれば「ブーウ」「カーアン」となりて、 ∇ が「 $\nabla \square \square \square$ 」に擴大せらるゝの形を採るなり、故に此等には「 $\nabla \square \square \square$ 」即ち「ブー・カン」なる記號を施すも可なれども、これは決して純二音語に用うべからざるなり、此他俯聲は陽、俯、陽、陽、陰、陰の四聲の何れにも前接することなし。

次に長音は其の名の示す如く短音を伸長したるものに均しきものならざるべからず、然るに英支の語に於ては長音を基準とし、短音を變則のものゝ如く取扱ふは、所謂原始的呼法を去ること遠からざるものか、そはともあれ國語の短音は陽聲俯聲のみ引長するを得て、杜聲は引長せらるべきものにあらず、そは既に斷聲したるものなればなり、而して陽聲の引長は「 $\square$ 」、俯聲の引長は「 ∇ 」の形を採る、其「 $\square$ 」を長陽聲と稱し「 $\bullet$ 」を以て聲符とし、「 ∇ 」を長俯聲と名け、「 $\bullet \bullet$ 」を其聲符とす、即ち長陽聲の記號は双陽聲に同じく、長俯聲の記號は陽陰聲のものに均し、元來長音と短音とは各別の聲符を定むべきは直觀上の自然なれども、豫て屢論せる如く、長音と短音とは其區域劃然たらず、且つ國語は常に短音本位なるを以て、之に一致せしむるは取扱上便多くして全く支障なかるべし、又長俯聲は「 $\nabla \bullet$ 」を以て其調を表するに至當とすること前條に述ぶるが如くなれども、長音に「 $\nabla \bullet \bullet \bullet$ 」との兩調あるにあらずるを以て、略に隨ひ二音語の記號に準ず、此れ又取扱上便にして發音上の誤を生ずること亦殆んど無からん、但し「 $\bullet \bullet \bullet \bullet$ 」(貴意)と「 $\bullet \bullet \bullet \bullet$ 」(紀伊)とを同じく「 $\bullet \bullet \bullet \bullet$ 」と書し、其の一音節なりや二音節なりやを聲符を以て分たんとするが如き希望には副ひ難かるべし。

扱陽俯兩長音中國語に最も多きは直長音撥尾長音にして、促尾長音之に亞ぎ、折長音は全く二音語に入るべきものとするときは、其例語左の如し、但此例語は東京、京阪兩地方同調のものをを用ひたり。

直長音

撥尾長音

促尾長音

●長陽聲

ゆー夕 はー法 どー堂

ばん晩 ぼん盆 さん三

ヤッ掛聲

●○長俯聲 あー噫 はー方 どー銅 もん門 ぶん文 さん贊 かッ 喝
右の中カッは禪僧の引導の語尾に附するものにして其調の●○なるに對し、掛聲のヤッは●●たり、
こは促音に兩調あるものにして、或は疑ふ人あらむも、其の大小の自由なるは呼び試みて知らるべ
し、尙は後條にも記する所あり。扱漢語の平聲、清語の上平は此長陽聲に均しく、清漢の去聲、漢
語の入聲、及び一音節なる英語の多くは長俯聲にして、杜尾長陽聲(長陽聲にして音尾の斷聲するもの即ち●●)は清語の下
平に當れども國語になく、曲俯聲(長音にして陽俯聲の如く調のもの即ち●▽)は漢清の上聲に適し、古人が漢語の去聲の例
に出されたる一音國語は之に當れるが如きも、現今にては未だ耳にせず、又杜尾長俯聲は全く例な
し、今便宜の爲左に二音語、長音語の聲符調名對照表を掲ぐ。

聲符	語類		聲符	調名	對照表
	二音語	長音語			
●	雙陽聲	長陽聲	●	陽俯聲	曲俯聲
○	陽陰聲	長俯聲	○	陽陰聲	杜尾長陽聲
△	杜尾雙陽聲	杜尾長陽聲	△	杜尾陽陰聲	杜尾長俯聲

既に國語の一音二音のもの及び長音の聲符を定めたれば、三音以上の語に對する記法に就ては之を
想像するに難からざるべし、されど以上に述べし所は主として編者の認定に依り、短音單位に基き
て説を立てたるを以て、更に一二の傍證を索むるに、我邦古代の字書と英語に關するものとを得た
り、因て先づ英語に關するものを茲に論じ、其他は聲符應用の條に記すべし。
元來支英の語は皆長音にして、殊に英語の stretch, strong の類に至りては國語の之に似たるものな

し、其の國語に類するものも短音節に就ては、支英共に充分に眞價を認められざることもなきものな
如く、又發音とアクセントとの關係に於ても其の範圍を確認し難き點あり、今岡倉由三郎氏の「英
語發音學大綱」の發音の條を見るに英語の母音を解して左の如く云へり。

母音の中、之にアクセントを加へて明かに發音し得べきものを「強母音」と云ひ、アクセントなく
口ごもつて曖昧に發音せられるものを「弱母音」と云ふ。

強母音 長音又は二重音 e(i) a(i) ai(i) ou(o) u(u)
短音 æ(æ) e(e) i(i) o(o) u(u) (便宜字數を節略せり)
弱母音 o(ə) æ i(i) ɔ(o) u(u)

又三省堂發行の「模範英和辭典」には左の如し。

長母音 強 a e i o u (注音同前)
弱 (アクセントなき) æ e i o u
短母音 強 a e i o u
弱 (アクセントなき) æ e i o u

此等は皆英語解法の通弊にして、アクセントの有無は其發音を變ずるのみならず亦其長短をも變ず
るなり、殊に自他音節の比較に因る以前に於てアクセントを論ずるは、彼の重念以前に四聲を論ず
る清語と比すべきが如きも、清語の四聲は、錯雜斯の如く甚しきものにあらざるが如し、されど邦
人の國語を扱ふにも、語原に因はれて寫音的記法に誤りを生ずるが如く、英語に於ても、英人は語

原的歴史的觀念より此解法に依れるものと見ば又咎むるに足らざるべし、唯國語は短音單位なるを以て、多少は語原的の變遷ありとも、新發音新長短に依りて之を記さば、此混亂を免かるゝことを得るなり。

正しくは獨立一音節語にも、此強弱に相當する分類あるべきも、其例甚稀にて、常には二音節以上の語の部分として現はるゝものなるべく、果して然らば、二音節以上の語は「ノ」「カ」等にてアクセントの所在を示さるべきに、音字毎に數種の記號を定めて之を示さるべからずとは、さても困難なる言語ならずや、隨つて本條は國語の聲調に比較するの道なきも、次條は稍注意すべきものなり。「英語發音學大綱」には更に記して曰く

二重音とは二個の母音が相寄り、其中の一つが主となり今一つが従となつて主從合體し一つの音節を成したものを云ふ。例へば「ア」音と「オ」音と相寄つて「アオ」(青)となり「イ」と「エ」と相寄つて「イエ」(家)と成る、その「アオ」と「イエ」の類を指すのである。但し「アオ」の場合では「ア」が主者では「エ」にアクセントがあるからに外ならぬ。「アオ」の様に「出」と「發」と成つて居る二重音を「下向き」の二重音と云ひ、「イエ」の様に「發」と「出」と成つて居るのを「上向き」の二重音と云ふ。英語の二重音は皆下向きのものである。

(注意) 東京調アクセント式にてアオ(青)イエ(家)

此處に説けるは普通のアクセントにあらず、一音節内のものなりといふ、其「出」と「發」は新式の陽陰聲に當り、長音にては長俯聲を指すこととなる、又「發」と「出」はアクセント派の○●を以て表せんとするものにして、其實質は新式の陽俯聲なれども、此形式にては承認すべきものにあらず、後に至りて之を證せん。次に同書は抑揚(accent)の條に至りて述べて曰く、一つの語が二個以上の音節で成つて居て、其の中の一つが他の音節より強く、しつかりと發音される場合に、斯く一つの音節に加へる發音の力を稱して「強勢」とも「あくせんと」ともいふ。今 important, ideal, musician などいふ語に就いて考へて見ると、皆三音節で成つて居る語であつて其の中第二の音節が一番強く力を込めて發音され第一の音節が第三の音節より稍や強く發音されることに氣づく。即ち第二の音節に「強勢」があり第一の音節に「中勢」があり第三の音節には「弱勢」があるので、此三種の語勢の程度は、定めれば定められるが、實際(一)アクセントのあるもの即ち「強」音節と(二)アクセントの無いもの即ち「弱」音節と此二通りの區別を設けて置けば、普通の場合には充分である。云々

なりと、斯くアクセントは種々の方面より説明せられたれど、二重音の條にあるは、二音節以上の語に於て、アクセントある音節に用ゐる呼法を示されたるものにて、元來英語の一音節語は父音尾のものに至る迄一般に「下向き」なるを知るべし、扱前記三音節の英語をインボータント、アイブーアル、ミュージシアンと假定し、之が聲調圖形の三階を▽ (強) ▽ (中) || (弱)と定めて前の三語に配當するときは、其形は▽ ▽ || の如き呼法となるべし、而して高橋氏の「發音辭典」に西

(五二)

陽聲なること勿論なり、随つて一短音にしてアクセント式に○を以て表はさるゝものは、新式に於ては●を以てせざるべからず、之に基きてアクセント式の●は▼となり、陽俯聲●▼の語尾なる▼と其の實質の一致するを見る、因て此兩調は

アクセント式○ 新式● う卵 き黄 く九
アクセント式● 新式▼ う鶉 き木 く苦 (東京調)

と記せざるべからず、随つて陰聲○には獨立の場合なく又語首に立つことなきを知るべし。其の杜聲に關することの如きは讀者の推定に任ず。以上一短音語、二短音語及び長音語に就て略は解説を施したるを以て、次段に於ては一般の應用に關して述ぶる所あるべし。

〔本論(前回)正誤七六頁に掲ぐ〕

語調原理序論正誤

第三回分

頁 行 誤 正 頁 行 誤 正

四二 一六 プ 鼻音の 四三 七 カ カントン 四三 八 カ カントン

第四回分

四二 一 (The) (The) 四三 一〇 の 四三 一〇 の

同 同 (The) (The) 四四 五 長音を 四四 五 長音を

同 同 悠々 悠々 四五 一七 エ 四五 一七 エ

同 同 引例 引例 五一 五 ア行 五一 五 ア行

四六 一〇 i 引例 引例 五二 九 まて 五二 九 まて

同 一四 (二又は三) (二又は三) 五二 一〇 全し 五二 一〇 全し

四八 四 音韻 音韻 五三 一 係 五三 一 係

四九 六 カウ 音韻 五三 二 係 五三 二 係

を認むるに客ならざるべし、因て之が證明を擧ぐるに先だち、古人の記法如何を伺ひ、次に二三の辯證を試みん。

(一) 類聚名義抄 此書の字訓には假字の周圍に^去上^平入を以て聲符を施し(之を^上平^去と解せるは伴信友氏の新寫本以來の誤謬なり)、左の如き形式を顯はしたるもの少からず、元より多種多様にして解し難きものも少なからざれども、其の^口即ち上聲なるは新式の陽聲にして、^口即ち平聲は新式の俯聲なること勿論なり、以て焦點式にあらずして兩面式なるを知るべし。

甲	アカカネ 銅	アカカリ 餅	アキト 腮	アクタ 芥
	アサツキ 嶋蒜	アシカ 筐	アツチ 期	アハラヤ 草亭
	アマキ 甘草	アラカネ 鏤	アラカハ皮	アラト 礮
	アラレ 雹	イカタ 筏	イカタ 鎔	イカリ 疋
	イダタキ 嶺	イタツラ 閑		
乙	アタヒ 直	アナカチ 剛	アヘヒ 鮑	アヒタ 間
	アラノラ 肱野	アラハコ 籠宮	アリサマ 舉動	アラカヘル 青蟻
	アラサハ 鯖	アカハカチ 赤酸醬	アカマクサ 都梁香	
	アカエムハ 赤卒	アクホ 曆	アクヒ 通章	アシナハ 葦索
丙	ウルシヌリノヤキシルノツホ 漆灸函	クルマノシトネ 鞆		

(タチシはタチシに均し、證あり)

(二) 文字反 五十音圖を記するに當り左の記號を施せるは連讀調を示したるものにして、其の上聲は即ち陽聲にして、^口は陰聲を表せること(こは去聲なれど)論ずる迄もなかるべし。

アイウエオ カキクケコ

(三) 音曲玉淵集 享保年中時中翁の著にして謠曲に關する雜説を集めたるものなり、其の中詞の訛に就て「右の章の如くいふべし左はなまりなり」と注し、左の如きもの九ヶ條を出せ

藤△藤戸のわたりをしへよとの

田△抑當寺せいすいしと申は

ハ△けんひいし五位のせう

るを見るに、「^一」は新式の「●」即ち陽聲にして、「^ゝ」は其陰聲「○」なること明なり、隨て是亦兩面式なり。

古來此の如く兩面式を採れるもの少なからざるに、彼のアクセント派は何故に焦點式を採り、隨つて全陽聲を指して平調と稱せしかは、前段に述べし英の三音節語に關する岡倉氏の説を見れば明なるべし。然れども岡倉氏の説は三階的なるを以て、國語の爲には尙ほ隔靴搔痒の感あるべし、因て茲に現代國語の應用上より實驗を経ざるべからず、然るに此實驗に關しては、讀者は先入主の觀念に囚はれて明瞭を缺くこと多からん、されど止むを得ず左に項を追うて例證を擧げんとす、事物の認

識は差違に基く、讀者の宜しく再讀再考せられんことを乞ふ。
(二) 左記の三語宛の四對は各對内に於て其調各別なるを以て、新式の如き聲符を用ひざれば其實を顯はし難かるべし。

阿克セント式		新 式	
第一例	來く 九く 既はや	來く 九く 既はや	はやく(同上) はやく(同) はやく(同)
第二例	戸と 砥と 見みる	戸と 砥と 見みる	みる(同上) みる(同) みる(同)
第三例	裳も 藻も 野ニのに	裳も 藻も 野ニのに	のにも(同上) のにも(同) のにも(同)
第四例	戸と 砥と 父と	戸と 砥と 父と	ととと(同上) ととと(同) ととと(同)

此等の中、既九と早ク、見ル戸と見ルト又は野ニ藻と野ニモ及び砥ト戸と父トとを同様に呼ぶべし。

的にして、一句としての呼法にあらず、随つて「九、戸、藻、戸」は獨立の時と異なる呼法となれるなり、若此四字を各本來の呼法に依らんとすれば、新式聲符の必要自然に起るべし、因にと(父)ととと(砥ト)とは同一呼法なれども、父は單語なるに砥トは名詞と助辭との連合にして熟語にもあらざるを以て、語原的に聲符を異にしたり、以下之に類するもの皆同じ。但し笛音の形容ヒーは長音なるを以て其引長は「▽」即ヒーイ、其原形はヒーにして、ヒイ(非違)は二音語なるを以て、原形ヒイ(京阪調)、其引長はヒーイ、即ち「▽」なるが如く、砥トは引長したるとき「▽」にして、トト(父)は引長するも「▽」なることを本性とするを忘るべからず。
(二) 感應詞又は感應助辭は各音節の獨立する傾ありて、左の如き呼法を成立することあり、之を新式にて記せば、

第一	第二
一「否」	二「好哉」
例	例
いいえ	いいね
いいえ	いいね
いいえ(普通用)	いいね(普通用)

等の如し、此中第一例のえは「在」の呼法、えは「江、柄」の呼法にして、えは獨立語になく、第二例のねは「値、子」の呼法、ねは「根、音」の呼法にして、ねは亦獨立語になきを知るべし、讀者の感想如何。

(三) 左の各句は句尾の二音と其前の二音と同調なりや。
中。に。蟹。 なかにかに。 獨樂と的。 こまとまと

蝸と子と たことごと 蝸の子の たこのこの
早く焼く はやくやく 糸も友 いともとも
旗の端 はたのはた 白い城 しろいろ
豆は健全 まめわめめ 起きる熾 おきるおき
月と環 つきとつき 走る端 はしるはし
鉢と蜂 はちとはち 離す鼻 はなすはな
隠れた格 かくれたかく 垣根の梯 かきねのかき
尙ほアカノタニシ(赤の他人)はアカノタニシ、カミモチトカミ(鏡餅と鏡)はカミモチトカミ
ミに改めずして可なるか。

(四) 左の二音語の各語の尾音はかくきは、其二音語の各音を長呼しつゝ連呼するとき、各々次の行の一音語の長呼と調均しく、

第一例 はは母 しか鹿、まく幕 つき月
は歯 か彼 く苦 き木 新式 聲符

又左の二音語は之に反して、其語首はかくきを長呼するとき、其の次の行の一音語の長呼と同一の調となるにはあらざるか、

第二例 はと鳩 かさ笠 くも雲 きり雉 新式 聲符

即ち第一例は、二音語の各音を引長せる「はは」の語尾なる「は」は、其の次の行の一音語の引長「は」と同調なるべく、第二例の二音語の引長は「はと」にして、其の語首なる「は」は、其の次の行の一音語の引長「は」に均しき調を生ずべし、斯くて其聲調は、各例下に記せる新式記號を以て之を表はすの至當なるを見ずや、恐らくは何人にも、第一例の二音語を「はは」と長呼し、又は第二例の二音語を「はと」と長呼することあらざるべし、萬一かくることあらば、「はは」の短縮呼は、はに歸すべし、此其實新式の「はは」に適合すべきものを誤認せるなるべく、「はと」の短縮呼は、はに歸すべし、此の「は」は、俯聲の一短音語に一音助辭の後屬したる場合か、又は長音語に短聲符二個を施したる形式にして、純二音語には此實質あるべからず、若又何れかの語に引長すべからざる性質あらば、それは英の父音尾の音節又は清語の下平尾に類する氣道閉の呼法にして、國語としては普通のものにあらず、即ち「は」若くは「は」にして、其の他の呼法にあらざるなり。

(五) アクセント派諸氏は左の各語の語首なる二音を等調と見ざるは何故ぞ、

掛	る	か	かる	七	草	な	な	な	こ	此	許	こ	こ	も	と				
銜	む	く	く	む	耳	垢	み	み	あ	饑	饑	き	き	ん	細	さ	さ	や	か
心		こ	こ	ろ	耳	寄	み	み	よ	躑	躑	つ	つ	じ	錢	貝	せ	せ	が
叩	く	た	た	く	九		こ	こ	の	七		な	な	な	都	々	逸	ど	ど
包	む	つ	つ	む	漣		さ	さ	な	み	儘	よ	ま	ま	獅	子	舞	し	し
祟	る	た	た	る	蝸	牛	で	で	む	含	む	ふ	ふ	ふ	斯	か	れ	ば	ば

殊に左の數語に至りても第一音と第二音と異調なりと見る人ありや。

怪々し〇

け ●
け ●
し ○

美々し

び●
び●
し○

女々しさ。

め●
め●
し○
さ○

甚し

५० ●
 ५० ●
 ५० ○

律[○]
々●
し[○]

ひ ●
ひ ●
し ○

又左の數語は同語を重ねて成りたる熟語なれば、語首二音と語尾二音とは全對的に異調を以て成れるにはあらざるか、即ち首二音と尾二音と律階的に相違して、陽聲面、陰聲面の別を成せるにはあらざるか、随つて第一音と第三音との異調たるは必要にあらずや。

○
●

○
○

い●
ち●
い○
ち○

云^〇●

々〇

8

い●
よ●
い○
よ○

各

おの
おの

片

人

換

かへかへ

ツ
カ
ツ
カ

つかつか

泣

人
知

1

々

ひそひそ

尙ほ論すべき點多けれども、紙數限あるを以て端を改めて述ぶることゝせん。

第四回分正誤

頁三七
 同五
 同四
 同二
 音讀
 音符
 表音
 表意
 高度
 列持
 久意
 正聲
 符
 四四四
 八七五
 四三三
 頁
 一〇七六
 行
 正しくは
 誤語
 注音符
 正音
 正しくは
 誤語
 注音符
 正音
 五五五
 一〇九
 四九
 頁
 一八上
 一七六
 行
 誤
 △△△
 第一は小さく第二は大きなものさす
 第二は大きなものさす
 第一は大きなものさす
 正
 誤

語調原理序論

井上奥本

五の三 國語の助辭助動詞の聲調。附り本語の聲調を驗する法。

助辭助動調は狹義に所謂單語にあらず、故に其聲調に於ても之を獨立に呼ぶと其職任にあるときとは自ら異なり、彼の表音字が洋字は勿論日本假字に於ても、其字の名としての調と言語の一部若くは其全體として用ゐられたるときは自づから異なるが如し、されば國語の聲調論上に於ては助辭助動詞の附隨したる語は、之を分割せずして直ちに單語と對照するを要す、此理は之を文法上より見るも亦一致する所あり、故に松下大三郎氏の「日本俗語文典」を見るに、

(五二)

助辭は廣義にいふ言葉のなれども、文典にていふ「詞」にはあらず。詞は自ら觀念をあらはす所の聲者なり。然るに助辭は詞に副ひて詞と共に觀念を表はすのみにして、己みづからは觀念を表はすこと能はず。(中略)助辭の、詞にそふ時はその助辭と詞とを合せて一詞とみるべきものなり。たとへば

春が 來れば 花も 咲くし 鳥も 鳴くでは 無いか
などの如く 〇を附したるものを一詞と見るが如し。

とあり、又高橋龍雄氏は「國學院雜誌」の本年三月號に於て、

單語は一つの纏つた思想をいふものである。意義ある聲音の單位である、章句の骨子たるべきものである。といへば、國文典の助詞は單語ではない。然るに英文典流の品詞別の形式に囚はれて、分書法の文字の形から見ると、彼の前置詞は、我が國語の助詞に當るものがある故に、助詞をも單語として説述した文典がある。(中略)而して單語に附屬詞の附屬したものも、やはり單語である。「余」も、「余は」も、「文典」も、「文典を」も、皆單語である。人が靴をはいても、足袋をはいても、人は人である。靴と足袋とを指して、人といふことは出來ない。(中略)

單語 單語 單語
例 余は 文典を 好む

と述べられたり、實に助辭(助動詞を含む、以下同じ)の附屬せるもの亦國語の音聲の單位にして語調の單位なり、從て此定義を忘れ、分類法に泥みて聲調を説くときは、遂に誤謬に陥ることあるべし、今假りに「日本音調論」に出でたるものを、新式聲符を用ゐて、動詞に助辭の附屬したるものの一部を擧ぐれば左の如し。

此等を見るに助辭の「ば」「と」は共に獨立には俯聲▼なるに、動詞に附屬しては「ば」は恒に陰聲にして、「と」は應變聲(上接の語に依りて變ず)なり、何とならば「ば」は上接聲の如何に拘はらず恒に「〇」となり、「と」

語調原理序論

二音			三音		
第一種	第二種	第三種	第一種	第二種	第三種
解とく	立つ	附つく	歸かへる	叩たたく	包つつむ
現然第一	とけは	たてば	かへれば	たたけは	つつめば
現然第二	とくと	たつと	かへると	たたくと	つつむと
已然	といたら	たつたら	かへつたら	たたいたら	つつんだら
將然	とくなら	たつなら	かへるなら	たたくなら	つつむなら

(五三)

助辭
を (居) きく (聞) よむ (讀)
は (指) をるは きくは よむは
と (指) をると きくと よむと
も (亦) をるも きくも よむも

等の如し、而して此等の助辭は京阪にては獨立には皆陽聲「●」に呼ぶなり。又助辭の種類に因りては應變せざるもの、及び本語の調を變する迄の勢力あるものなきにあらず、彼の文語のナカリケリ（無かりけり）のケリが本語に應ぜざる、又東京調の副詞性助辭クライ（位）がドレ（孰）ドコ（何處）ヘイシ（兵士）カゾク（華族）等に後接して、ドレクライ、ドコクライ、ヘイシクライ、カゾククライ等となりて、本語の調をも全陽たらしむる等の例是なり。

次に京阪中古の語調中、助辭の體言に接する定則を見るに、類聚名義抄に依れば

本語 ● 句

本語 ● ▼

蟻	アリ	アリノヒフキ（桔梗）	栗	アハ	アハノウルシネ（栗粳）
魚	イラ	イラノフエ（脰）	稻	イネ	イネノカヒ（稈）
牛	ウシ	ウシノハナツラ（紉）	瓜	ウリ	ウリノサネ（瓣）
蟹	カニ	カニノコ（蟹黃）	肩	カタ	カタノホネ（膊）
金	カネ	カネノサト（鐵精）	衣	カサ	カサノクヒ（扱）

本語 ● ○

本語 ● ○

石	イシ	イシノチ（石乳）	神	カミ	カミノヤカラ（赤箭）
犬	イヌ	イヌノツタミ（叱）	鴨	カモ	カモノクソ（鴨通）
岩	イハ	イハノカハ（石韋）	鞍	クラ	クラノオホヒ（鞍把）

等の例あり、先づ其の本語の聲符を解せん。□は新式の●、アクセント派の○○（平調）にして古人が上聲符のみを用ゐたるは、其双深を認めて双淺を認めざりしを知るべく、□はアクセント派の●にして、新式と共に古今一般に通じ、□はアクセント派の●と均しく、新式の●に値するものにして、古人も其の分析を誤りたるを見るべく、□に至りては稍々奇にして、アクセント派の○○に似たるも、其實古人は平聲を▽の如き發音力に依るものと信じ、漢字の長音に□とあるを二假字に敷衍して□としたるものなることは、近世古派に屬する漢語の四聲の解に徴するも明なり。次に此體言に後接せる助辭「ノ」の用法を見るに、全く應變聲にして、

本語

●

● ▼

○

助辭「ノ」の附きたるもの

●

● ▼

○

なる定則は京阪現今のものと同じなるを知るなり、此助辭「ノ」の用例は同書中に於て、名詞の一音より數音に至るもの、何れにも附屬して、其例約百六十あれども、この定則に合せざるは誤寫其他相當の理由ありと認め得るものみにして、不能解の例句殆んどなし。次に同書に載せられたる指定助辭「ト」の用例を見るに、

層撲トカサネ
燭耀トテレリ
颯颯トシナフ
經營トメクル
コト、ス (事)
ナム、トス (向)
ノリトス (刑)
マクサトスル (餽)
セムトス (欲)
セムトス (垂)
トス (垂)

等とありて、本語の品種及其聲調に拘はらず、此「ト」は恒陰聲なるを知るなり、此の類のものにして

(五八)

(一)イナトナラハ(不能) (二)ヒト、ナル(育) (三)及トシク
等二三の例外の如きもの、見ゆるは、(一)と(三)とは誤寫なるべく、(二)は「ヒト、ナリ(天性)」の例もあれば、こは此の類の熟語ならんか、別に「ト(將)」と載せたるは、此語の名稱(即ち獨立の場合の呼法)として新式の陽聲「●」を表し、京阪現今の呼法と一致するを見る、此より類推すれば前條に擧げたる助辭「ノ」も獨立には陽聲たりしなるべし。以上に説ける所の「助辭の本性」に就ては未だ先輩に其の説ありしを知らず、唯「東京辯」に二合助辭に就て着目せられたるは僅に之に關す、其説に曰く、

簡單な助辭は大抵平調であるが、はもの類が次に來ると、音の揚る場合が多い。これは意味を強める爲とも見られるので揚げないやうにも言へる。

例 僕は此處まで車で來ました。 ボクハココマデクルマデキマシタ

例 それで ソレデ

車で クルマデ
云つて イッテ
云つても イッテモ

然るに同書に

何方でも

何時でも

御両親にも

ドツチャデモ
ゴリョーシンニモ

調べるには

シラベルニワ
イマノワ

今のは

在るには
上では
アルニワ
ウエデハ

等の例あるを如何に見られたるか、彼の平調を陰聲の連續の如く見ればこそ「は」もの類が、次に來ると、音の揚る場合が多い。」との奇説も起るなれ、助辭は品詞分類上從位にあるものなれば、本語の調に順應するか若しくは小音に傾くべきは見安き道理なり、彼の清語に「助辭虚字、即チ兒、了、著、子、ナドノ字は、都テ上平ニ讀ムモ妨ゲナシ」(此場合の上平はアクセント派の平調、「韻學私言」の双淺等の觀念に均し)といへる、亦後屬助辭の例證と見るを得べし、然して二合助辭に於ては此柔順なるもの、連續なるにより、第一助辭は本語に順應するも、第二助辭は第一助辭の柔順性を受け續ぎて、更に柔順の本性を發揮し、遂に陰聲に限ることとなるなり、故に此の他の二合助辭に於ても、特に語尾を張るときの外●●又は▼等の形式を採ることなく、殆んど皆●○にして、本語の語尾陰聲なるときのみ助辭は○○となるを常とす、隨つて前例の「それで」以下の三例は、本語の陽聲尾なる爲助辭は●○即ち陽陰となり、「何方でも」以下の六例は本語の陰聲尾に順應して○○

語調原理序論

井上 奥本

六、語調に關する雜說

(一) 英人は發音論内に於て、強母音弱母音の別を立て、又二重音の説を設けてアクセントを説く然かも別章に於ては曰く、アクセントとは自他音節の緊張の差にありと、是れ發音と聲調とを混合するものにあらすして何ぞや。又清人は聲帶閉を用ゐる發音を聲調の一種として四聲の内に列し、漢人は父音尾の音節を聲調の一種と立つ、是亦發音と聲調との限界を破るものなり。此三種の中英人の誤は一短音一記號なる國語式に依りて脱するを得、父音尾のものは小假字を右傍に記する法、(即ち促音を記する法)に依り之に應ずることを得れども、閉帶者(杜聲)は之を表はすに便法なきを以て、暫く聲調に列したり、故に後日之を聲調分類より削りて、發音法に列するを要する期あるべし。

(二) 假字の稱呼は之を一字毎に呼ぶときは、ア、イ、カ、キ、等と唱ふるを正則とす、然るに京阪にてはア、イ、カ、キ、等と呼ぶを常とし、若し之を短呼せしめんとすれば、ア、カ、の如く促尾音となるか、又はア、カ、の如く杜聲(即ち斷聲)と成ること多し、此等は熟練的に修正する外なきも、京阪の此長音は [] 即ち [] にして、 [] 即ち [] と解すべきものにあらざることは此等と同發音の單語に其調を比較して知ることを得べく、又英語は一般にビ、シー即ち ∇ にして、●●の形なるは殆んど稀なることは注意すべき點なり。

五十音圖の連讀調は東京にてはアイウエオ、カキクケコ(アクセント式○○●○○○)の例なりと京阪にては其形●●●●●なり、彼の中古の文書「文字反」に、アイウエオの形式を以て十行總てを記したるは、此京阪調に均しきを示せるものなるべし、此等軌範音字の調に至るまで、關の東西其風習を異にせるは亦奇ならずや。

「いろは歌」も字毎の調は五十音圖に均しき事勿論にして、其他に一種の連讀調と、長歌としての調とあり。先づ編者の郷里地方の連讀調を擧ぐれば、

いろはにほへと　　ちりぬるをわ　　よたれそつね
やまけふこえて　　あさきゆめみし　　ゑひもせす　　ならむうゐのおく

の如し、こは習字帖に七字一行として書したるものを、讀み慣れしめたるより起りしものならん。次に長歌調には種々あれども、元より何れを正とすべくもあらず、只左に二三を擧げて讀者の參考に資す、其本文の如きは一を擧げて他を略せり。

日本のロー　　いろはにほへと　　ちりぬるを　　わかよたれそ　　つねならむ
マ字社　　うゐのおくやま　　けふこえて　　あさきゆめみし　　ゑひもせす

伊澤修二氏　　○○○○○●　　○○○○○●　　○○○○○●　　○○○○○●　　○○○○○●

無松文雄氏　　○○○○○●　　○○○○○●　　○○○○○●　　○○○○○●　　○○○○○●

(和字大觀鈔)　○○○○○●　　○○○○○●　　○○○○○●　　○○○○○●　　○○○○○●

編者の地方

(三) 古事記にて字比地邇上神、妹須智邇去神等とあれども、「平」を以て聲調を標したるものなく、又「文字反」にはアイウエオ、カキクケコ等の形式を以て五十音圖の十行を一律に記し、又加茂真淵氏の「語意考」には字比地邇上神次妹須比地邇去神とあるを見れば、此等の「去」は編者の所謂陰聲を表せるものなるべくして、契沖氏の「去聲は、まるやうに聲をまはす」なるものと一致せず、然るに「金光明最勝王經音義」には乎加須(侵)久知比留(屑)等とあり、「類聚名義抄」には阿克ヒ(通章)アヒタ(間)等とあるを見れば、此等の「平」「字」の左下の符)は亦編者の陰聲に當れるが如し、因て皆川氏の「清語會話」を見るに「重念の字の次に在る文字は、其固有の何聲たるを問はず、多くの場合に於て輕く去聲又は上平(漢語の平聲)の如く發音して差支ないといふ事である、それは會話の説明になつて來ると、澤山其の實例が出て來るから、其の場合に更に説明をする」とあれども、如何なる接續には去聲となり、如何なる場合には上平となるかの嚴然たる區別ある説明文は、未だ同書中に見當らず、又英語に於ても、二音節以上より成れる語の或る一音節にアクセントあるとき、アクセントある音節よりも前なる音節は、其調に傾斜ありや(即ち去聲なりや)或は陽聲(韻學私言の双深、即ち正當なる平聲)なりやを説ける例なく、其のアクセントある音節よりも後なる音節に就ても、或は去聲の如きか、又は陰聲(韻學私言の双淺)なるかを説けるを聞かず、之を要するに、陰聲は獨立語に存せざるを以て、別に聲符を定むべきに、皆然かせずして、獨立語に用ゐる記號に依らんとせしに因り、各人各様の臆斷に基きて聲符の用法を定め、遂に矛盾を起すに至れるは止むを得ざる所といふべし。

(四) 世に音義説といふものありて、發音を説くに當り、カは堅き音なり、故にカタシの語原たり、スは鋭き意なり、故にスルドシの語原たり、等と解せり、此の如きは絶對的理由にあらざるを以て、之のみに依りて語原を解せんとするは甚だ危険なれども、亦一部の眞理たるを失はず、語調學上にも此解法に類するものあり、今假りに之を調義説と稱せん、此調義説の最も早く世に出でたるは、佐藤寛氏の「本朝四聲考」に引ける松本新左衛門氏(下總銚子の人、其説庚寅新誌にも出づ)の説なるべし、同氏は語調を上言、中言、下言の三種に分ち、其根據を高低、上下、大小、貴賤、尊卑の五事の程度に置かれたり、元より高低、上下は其事物の位置又は高さに關し、大小は其量に關し、貴賤尊卑は人事的の階級なるべけれど、上中下三言の實質明ならず、隨つて之を五事に對應せしめたる功果亦知り難し、次に之に着眼せるは今村明恒氏の「東京辯」なり、氏曰く

動詞の前に「お」を付けた云ひ方、及び終りに「ます、ません、ました」等を付けるときには、動詞自身は皆平調になる。

かく(書く) かきます
はなす(話) はなしません
おかしなさい(御書きナサイ)
おはなしなさい(御話しナサイ)

なりと、此等はアクセント派の「アクセントの消失」と稱するものにして、其何故に消失するかの物質的説明に至りては、必ずや同派には適解なかるべし、然るに編者が曩にヘイシ（兵士）ドレ（孰）が

副助辭クライ(位)に前接してヘイシクライ、ドレクライ等となるを解せし如く、前接語の語尾なる陰聲は後屬の陽聲に接續する爲陽聲に變じたるものと見て、

かく。ます。かきます。なさい。おきなさい。
はなす。ません。はなしません。なさい。おはなしなさい。

と解するとき、其理義甚だ明なり、故に之を以て、尊者待遇の語なるが爲に聲調の變化を起せりとのみ説くは不可にして、山田美妙氏の「日本音調論」に、とく(解ク)たつ(立ツ)のおとき(御解)おたち(御立)となり、たつ(叩ク)まよふ(迷フ)のおたつき(御叩)おまよひ(御迷)となる(新式にては●●●なる義なり)といへるのこそ、尊者待遇の爲陰聲の俯聲若くは陽聲迄擴大したるものと見ることを得んか、之を編者の郷里の語に照すに、身分薄きものをよえもん(與右衛門)げんえもん(源右衛門)ろくべい(六兵衛)等と呼び、同名にして稍身分ある方をばよえもん、げんえもん、ろくべい等と呼ぶ例あれども必しも一定せず、此等も尊者の爲に陰聲の陽聲となりたるなりとも、語尾にどん(殿)さん(様)を附せんとする準備なりとも、又は語尾のどん、さんを略したる爲、其の殘部猶ほ陽聲を保てるなりとも説くことを得べし、終りに、小學教員は生徒に對し、みのうえ(井上)まえた(前田)等と呼ぶにも拘はらず、生徒相互間には多くのうえ、まえたと呼び、又漁師町杯に於ては、男兒の名を呼ぶにはたけ(竹)まつ(松)等の調を用ゐ、女兒に對しては、たけ、まつ等と呼ぶを通例とするが如し、此等も亦相當の調義の理由あるべし。

(五) 音讀の熟語名詞は多くは連陽聲(●●●●●)なり、こは後屬音に連續せんとして前者が陽聲を

持久する故なるべし、訓讀のみがはとせんべいとを熟語としてのみがはせんべいとを呼ぶなり、故に今村明恒氏も之に着眼せられたれども、同發音にして音讀なるげんき(元氣)げんき(街

氣杯の二語さへ、其調各別にして必ずしも一定せず、殊に訓讀のものに至りては、「松風」「山川」等皆之が規準なきを以て、論理的に講明し難く、其稍定則あるが如きは僅に調義的に成立せるものなり、故に古人の多くは、調書を検する爲に熟語を用ゐたれども、此に依て熟語の調の成立を論じたること殆んどなし、然るに山田美妙氏が、熟語名詞と、用言活用形と、助辭用法と、熟語動詞とを一括して論ぜられたるは遺憾なり、此等の中、用言活用形及び助辭助動詞の用法に規律あるは元よりにて、之に亞ぐものは熟語動詞なり、熟語動詞とても、ひもとく(繕)はなひる(噓)あしきる(別)等の類は、稍不規律なるべきも、二重動詞たるまらうく(待受)たちかへる(立歸)の類になりては、助動詞の用法に似て殆んど完全なる規律あるものゝ如し。

(六) 「日本のローマ字社」の機關雜誌「ローマ字世界」に國定讀本の讀方とて載せたるものゝ中、一所にははまべ(濱邊へ)とし、他所にははまべのまつ(濱邊の松の木)としたる、又一所にはちからがつよいとし、他所にはちからのつよいとある類は、各前者は一般の文法的にはまべ及びちからがつよいの義にして、各後者に於ては、はまべのまつ及びちからのつよいとなりて句勢を變じたるものなり、彼のヘイシ(兵士)とクライ(位)と接續してヘイシクライとなるも此類の一種にして、此の如く句勢の普通の文法的より變じて成りたるものを熟調句と稱す、編者の郷里に於ても文法的にはたんごのひと(丹後の人)又はひとのもの(人の者)なるを時宜によりては、たんごのひと

又はひとのものと呼ぶを例とす、將來此等の句調、章調、段調等の定則を研究するは、亦斯道學者の責任なるべし。

(七) アクセント派にて記されたる東京調には、オーキイ(大)チーサイ(小)ホーエ(法衣)チュギ(忠義)又はダンダン(追々)ミンナ(皆々)オンナ(女)コンヤ(今夜)等とありて、語幹の長音尾と撥音とにはアクセントなしとせり、然るに伊澤氏の「正讀法」に限り、ユダチ(夕立)コバイ(紅梅)オキイ(大)チーサイ(小)又はトンデ(飛)ヨンド(呼)ダンダン、ミンナ、オンナ(以上の「ー」は音勢)等の例あり、元來直長音及び撥尾音が連陽聲……たるを得る以上は、此に後屬する者の陰陽如何に拘はらず、既成の調を維持することを得るは勿論なり、故に伊澤氏の例語を新式聲符に依りて記したるユダチ、コバイ、オーキイ、チーサイ、及びトンデ、ヨンド、ダンダン、ミンナ、オンナ等は成立可能にして唱呼困難ならず、是を以て此等の呼法は京阪にては通常の事なり、然らば「正讀法」の記載は正當なるかと云ふに、伊澤氏の所謂音勢其物の定義未詳なるを以て、單に然りと答ふること能はず、唯編者の實驗に徴するに、東京人もコバイ、オンナ等の唱呼を用ゐるを耳にせり又山田氏の「日本音調論」には、話語の活用を擧ぐるに當り、すふなら(吸の將然段)すくふなら(救の同段)等の例の僅に見ゆるは、スーナラ、スクーナラと發音すべきを示すものならば、長音尾にアクセントある例ともすべけれど、同氏の「日本大辭書」内には未だ此呼法を見當らざれば、此活用の方式の誤まれるなるやも測り難し、されど唱歌「君が代」を粗略に唱ふるにも、キミミガーと呼びて何等の困難なく、此を連呼するに……等と變更する要を感せず、以て長音尾……

……のあり得るを知るべし、或は英語の長母音及びM尾N尾の音は……のみにして、……のものなきを以て、アクセント派諸氏が、強ひて此規定を國語に移植せんと試みられたるかとも見ゆれど、誰かかゝる暴舉を企つるものあらん、殊に英語のN若くはMと國語のンとは大いに異なる所あり、田丸卓郎氏は之に關して「ローマ字世界」誌上に説をなして曰く、

一體日本語では、撥音は他の音ア、イ、カ、キなどと同じ様に一人前の値のある音である、ウマやウメのウも實はそれと同じ音であるので、同じ理で、日本の歌ひ物でも撥音は他の音と同じ値を持つて居る様に取扱はれる。謠曲のゴマブシに音を宛てる所でも、唱歌の音譜に言語を宛てる時にも、又音を長く引く所でも、ンと他の假字と取扱ひに違がない。琴歌にも、

…… 034 — 7643 —
ふに めかん

などである。この點で、日本のンは英語や獨逸語の譬へばMENいふ様な語にあるNとは全く違ふ性質のものである、(中略)これは撥音ばかりでなく、促音も日本語のは特別だから、多くの西洋人の云ふのが變にきこえる、「日本語」といふ語などでは、「ツ」のつまる所と「ン」の撥る所とがた

いそう窮屈に聞こえる。
耶蘇敎の讚美歌は日本語であるけれども、それにある撥音は日本の歌ひ物や唱歌にある様には取扱はれて居ないで西洋の言語のNと同じ様に、即ち、「前接音の音尾に短かく添える」音に成つて居る、即ち、西洋人のいふヘンナ日本語の云ひ方にしてある。譬へば

.....1 2 | 3 — 2 1 5
 い-や-や 3-た-わん(MaN)

これが斯うなつた謂れは聞いたことがないけれども、推測するに、西洋人の宣教師杯が、Nだけで一つの音譜を歌うと云ふ様な事は出来る理がない」といふ様な理窟をいうた、又は考へた爲ではあるまいか、それにかゝつた日本人も、西洋人の云ふ事が何ンデも正しいものと思つてそれに従がつたのではあるまいか。

又同氏は同誌上に於て某氏の問に答へて

馬を Mare と書くといふ理由は、其 N を日本の N と同様に發音させる所にあるのですが、N は西洋の N とは違ひます西洋の N は全くの父音としてあつて、それだけの音を長く引くことはありませんが、日本の N は N だけで音を若干時間(他の通常の音と同様)引いて言うて居ます。其性質は寧ろ「佛語の鼻音母音と同様」一種の母音です。つまり、N はローマ字で N と書いても、一音節と見るべきもので、實際一綴りだけの時間も與へられて居るのです。従つてそこにアクセントがあることも出来る(ないことも出来るが)のです。

とあり、以て國語の N の眞價を明にすることを得べし。

次に語幹の促音に就ては、アクセント派諸氏及び伊澤氏共に此にアクセント又は語勢も置かれず、ラッカ(落花)アッタカイ(暖イ)ガッコー(學校)等の類のみなり、然るにガッコー、マッタシ(全)等が連陽聲たるを認むる以上は、此語幹の促音 N は陽聲なり、されば其後屬者の何聲たるに拘はらず、

と(日記)モットモ(最)等の呼法は成立し得べし、實に從來は編者は、促音は語幹にあると語尾にあるとの別なく、陽聲に後屬する促音は皆陽聲にして、陰聲に後屬するは皆陰聲なりと信じ居たりき而して東京調と全然反對なるに驚きたりき、其後女名トク、カッ等を略呼して(ク、ツの母音を消して)トク、カッ等と呼ぶ人あるを知り、又編者の郷里にては

オット
オット
オット
「居ては」をオルトと轉じたる後、促呼するもの、
突然想起する所ありし時の掛聲、
「彼れにて」をアレデと轉じたる後促呼するもの、
「有る故に」をアルデと轉じたる後促呼するもの、
「彼にては」をアレチャと轉じたる後促呼するもの、
「有るだ」をアルチャと轉じたる後促呼するもの、

等の呼法少なからざるを知りて、「促音の調は前接音の調に準ず」との見解は全く破れたり、之を要するに長音尾及び撥音、促音共に其前屬音の調に拘はらず、他の通常の音と等しく陰陽兩聲各成立するものと知るべきなり、決して英語の呼法に拘泥すべからず、殊に前節田丸氏の言を再讀せば思ひ半に過ぎん。

(八) 今英語の聲調を強中弱の三階と見るとき、二音節語の第一節にアクセントあるときは、此第一節は「強」、第二節は「弱」にして、その第二節にアクセントあるものは、第一節は「中」、第二節は「強」なるべし、「英語發音學大綱」の三音節語の解(「國語の調素の條」に引けるもの)を見れば此義明な

り、果して然らば、二音節語なる *con'duct* 及び *con'duct* 又は *for'ment* 及び *for'ment'* に對し、一音節なる *son* 又は *for* は「強」なるか、「中」なるかといはゞ、之を「中」と解するを以て至當とすべし、而して此等の中の各音節は、一音節語も二三音節語中のものも皆傾斜ありて、新式の長俯聲(支那の去聲)に似たるは明なり、右「發音學大綱」に於ては、二重音のみに就て音首にアクセントありと説けど、二重音なる *They*, *By*, *Be*, *Do* と純一音節なる *con'tor* とは、聲調上何等の區別あるべからず、隨つて此等は國語のゼイ(稅)ハイ(盃)ドー(銅)(以上東京調)と同調なるべし、抑此等一音節の語は、英語としては常に何等の聲符を施されず、然るにアクセント派に於ては、此英語の調に酷似せる「盃」「贊」等を *hai*, *san*, 又は *hai*, *san* 等と記し、英語の調に類せざる「灰」「三」等は、*hai*, *san* 又は *Hai*, *San* 等と記して、國語辭典又は國定讀本の讀方を編して曰く、「中學にありし者又は一と通り横文字を學びしものは、之を見て呼法を誤まるの虞なかるべし」と、此くて英語として聲符なきものには聲符を施し、英語に異なる調の語をば、英語の記法と均しく無符に止むるの奇觀を呈せり、何んぞ讀者の此に手(否口)を觸るゝを得ん、故に國語の爲には、國語に適する記號を定めて後ち國語を扱はれんことを望むものなり。

(九) 長音は萬國の言語に用ゐる音節中最とも普遍のものなるが如し、因て左に其聲調別分類表及び其分布表を掲ぐ、元より創始の試みなるを以て尙ほ補正を要する點少なからざるべし、以下先づ分類表に就て少しく註脚を加へん。

(イ) 長音の調類は元より長陽、長俯、曲俯の三種に限るべきなれども、漢語に於ては入聲を

聲調別長音分類表

聲調		音尾		聲音圖	通用符	分類調名	注	意
長陽聲	清	擦氣	阻氣	▽	●	阻氣尾長陽聲	放聲尾と斷聲尾との別は發音的なれども音字同一なるを以て通用聲符を區別す	擦氣尾と阻氣尾との通用聲符は放聲尾と同一なれども綴字上には其區別現はる
			擦氣	▽	●	擦氣尾長陽聲		
	濁	斷聲	阻氣	▽	●	阻氣尾長陽聲	放聲尾と斷聲尾との別は發音的なれども音字同一なるを以て通用聲符を區別す	擦氣尾と阻氣尾との通用聲符は放聲尾と同一なれども綴字上には其區別現はる
			擦氣	▽	●	擦氣尾長陽聲		
長陽聲	清	擦氣	阻氣	▽	●	阻氣尾長陽聲	放聲尾と斷聲尾との別は發音的なれども音字同一なるを以て通用聲符を區別す	擦氣尾と阻氣尾との通用聲符は放聲尾と同一なれども綴字上には其區別現はる
			擦氣	▽	●	擦氣尾長陽聲		
	濁	斷聲	阻氣	▽	●	阻氣尾長陽聲	放聲尾と斷聲尾との別は發音的なれども音字同一なるを以て通用聲符を區別す	擦氣尾と阻氣尾との通用聲符は放聲尾と同一なれども綴字上には其區別現はる
			擦氣	▽	●	擦氣尾長陽聲		
曲俯聲	清	擦氣	阻氣	▽	●	阻氣尾長陽聲	放聲尾と斷聲尾との別は發音的なれども音字同一なるを以て通用聲符を區別す	擦氣尾と阻氣尾との通用聲符は放聲尾と同一なれども綴字上には其區別現はる
			擦氣	▽	●	擦氣尾長陽聲		
	濁	斷聲	阻氣	▽	●	阻氣尾長陽聲	放聲尾と斷聲尾との別は發音的なれども音字同一なるを以て通用聲符を區別す	擦氣尾と阻氣尾との通用聲符は放聲尾と同一なれども綴字上には其區別現はる
			擦氣	▽	●	擦氣尾長陽聲		
長俯聲	清	擦氣	阻氣	▽	●	阻氣尾長陽聲	放聲尾と斷聲尾との別は發音的なれども音字同一なるを以て通用聲符を區別す	擦氣尾と阻氣尾との通用聲符は放聲尾と同一なれども綴字上には其區別現はる
			擦氣	▽	●	擦氣尾長陽聲		
	濁	斷聲	阻氣	▽	●	阻氣尾長陽聲	放聲尾と斷聲尾との別は發音的なれども音字同一なるを以て通用聲符を區別す	擦氣尾と阻氣尾との通用聲符は放聲尾と同一なれども綴字上には其區別現はる
			擦氣	▽	●	擦氣尾長陽聲		

一種の聲調と立てあるを以て、之に準じて音尾の清濁を分つ、次に清語の下平は斷聲尾にして、是亦發音の種別なれども、便宜上一類とし、他は皆此等に基づいて、類似のものを國語の中より採集したり。

(ロ) 放聲斷聲の別は從來屢々述ぶる所の如く、擦氣阻氣の別は音素の條に説ける恒開、壓開の

別に當り、其壓開は熟音と成りたる場合にして、長音尾たる促音に於ては、閉ぢたる儘なるを國語の本性とす、而して擦氣にはフス等を右邊に小書し、阻氣にはクツブ等の假字を右邊に小書するなり、高橋龍雄氏の「國定讀本發音辭典」に所謂「中止音」と「促音」との區別之に同じ、國語は語尾に於ても語幹に於ても此別分明なれども、漢英の獨立一音節語の父音尾は、其一部類たる^h等は擦氣音に適當し、他の一部類^{p, t, k, b, d, g}等は、例の「氣流の密閉後の放發」ありて、之に似たる國語の呼法なし、されど暫く阻氣に編入す、又英語の語幹に現はるゝ促音は、國語上の種別と均しきが如し、尙ほ長音幹の條を參照せられよ。

(ハ) 聲音圖は聲帶振動の全長に亘るものには中央に長縱線を施し、其音首のみに限るものには

聲調別長音分佈表

分類	調名	聲音圖	日	清	漢	英
放聲尾長陽聲			堂 ^{トウ} 灰 ^{グアイ} 三 ^{サン}	上聲 [↑] 去聲 [↓] 入聲 [↖] 平聲 [↗]	上 [↑] 去 [↓] 入 [↖] 平 [↗]	
斷聲尾長陽聲			(ナニ)疑問ノ	平 [↗] 麻 ^マ 孩 ^{ガイ} 堂 ^{トウ} 壇 ^{タン}	平 [↗] 歌 ^ガ 該 ^{ガイ} 剛 ^{コウ} 單 ^{タン} 甘 ^{カン}	
擦氣尾長陽聲			デス ^(である) (京阪調)			
阻氣尾長陽聲			ヤッ ^(掛聲)			
放聲尾曲俯聲			(旗) 役 ^{ヤク}	上聲 [↑] 馬 ^マ 海 ^{カイ} 莽 ^{マウ} 滿 ^{マン}	上聲 [↑] 駕 ^カ 概 ^{ガイ} 改 ^{カイ} 竄 ^{ソウ} 感 ^{カン}	
放聲尾長俯聲			銅 ^{ドウ} 盃 ^{ハイ} 贊 ^{サン}	去聲 [↓] 罵 ^マ 害 ^{ガイ} 上 [↑] 扇 ^{セン}	去聲 [↓] 箇 ^カ 概 ^{ガイ} 鋼 ^{コウ} 且 ^{ジュ} 紺 ^{コン}	Mu, By, Tang, Jan, Ram

斷聲尾長俯聲		(ナニ)詰責			Kiss, Buzz
擦氣尾長俯聲		デス ^(である) (東京調)			Rag, Pad, T
阻氣尾長俯聲		カッ ^(禪僧)	入聲 [↖] 各葛閣		Dook, Rat, Rap

半長線を畫す、屬尾の「×」は濁音に於ては斷聲を表し、清音にありては其他の氣道閉を示すこと例の如し。

(ニ) 曲俯聲は音尾急衰なるに聲帶振動なくては急衰せず、又急衰にして斷聲を兼ねたる例なし因て一種とす。

(ホ) 通用聲符は表内に注意せる如く、實用上には●●●●●●●●●●の五種となる。
次に分佈表に就きては、

(イ) 濁音尾の國語に於ては直長音、折長音、撥尾音を示すを主眼とし、清語には撥尾音二種、漢英に同音各三種を存す、尙ほ長音尾の條を參照せられよ。

(ロ) 漢英の父音尾のものは各其位置を撥音尾に對應せしめあるも、^hの尾ものは其對應撥音なし。

(ハ) 堂、灰、三及び銅、盃、贊は、各語共に京阪調と東京調と一致せるものゝ如し。

(ニ) 斷聲尾長陽聲ナニは溫順に反問する場合、其長俯聲なるは怒氣を含みて詰問する場合ありこは意思の強き場合の方、却て音尾の衰ふるものゝ如く見ゆるは、調義上如何に解すべきものな

らん、尙ほ此二語は長音ならねど、他に好例を見當らざるを以て挙げたり。
 (ホ) デスは「デアリマス」の略にして、其の母音ウの消失したるものなり、其調多くは掲記の如く東西の別あり、尙ほ之に類する語多けれども略す。

(ヘ) ヤッカッは氣道閉に終るものにして、英の P, T, K 尾に終はるものと稍異なること前述の如し、そのカッ(喝)は禪僧の引導の句尾に附するものにて、國語辭典「ことばのいづみ」に集載せり。

(ト) 「旗、役」は長音にあらねど假りに擧げたり、「漢語の四聲」の條に出せる引例に依れば、近世の京阪語には此呼法の長音ありしが如し、今猶或地方に此習俗ありや否や。

(十) 從來音調てふ熟字は稍廣く行はれあるにも拘はらず、此編に於て「聲調」てふ語を採りたるは奇を好むに似たるも、音は一般に通じ、聲は稍限る所あるは、漢字としての從來の用例なり、さりとて喉頭の發音瓣を「聲帶」と稱すとも、濁音を「有名音」、清音を「無聲音」と稱するは甚しからずや、何ぞ無聲の音あらん、或は「聲息」てふ熟字を分解して、濁音には「聲的音」を含み、清音は單に「息的音」なりと云はんとするか、要は禮記月令疏に單出曰「聲」雜比曰「音」とあるに盡きたり、鐘聲箏器の例も古し、樂器に音曲と云ひ、歌謠に聲曲と稱するも一理あり、唯發音は働器の用法に關すること多く、語調は發音力に基き、聲帶音に關すること多し、(父音尾にも獨立父音にも音の大小あり、隨つて聲調の種別を生ずれども) 因て一方を發音と呼ぶに對し、他方を聲調と名づくること亦可ならずや、彼の「文鏡秘府論」を見るに、

麗彩興錦肆爭花。發響共珠林合韻。然其聲調高下未會當今。唇吻之間何其滯歟。

文多古質未營聲調耳。

等とあり、且つ東洋には古來四聲の目ありて、今日猶ほ行はれつゝあれば、こは古今雅俗に通する妥當の名稱なるべし。

七、歸結

以上序論としては、比較的多數の紙面を費し、に拘はらず、斯學の草創なると編者の不敏なるとは、その含蓄をして多からしめず、殊に古今東西の材料を集めて、之に品詞的文法的の解決を施し、進んで語原的、調義的分析を試み、轉じてエンフッヅ、インフレクシヨ、モブエレーシヨンの定則を明かにし、退いて古今音韻家の説と古文書に現はれたる聲調とを判斷することの如きは、一朝一夕の業にあらず、篤學の士は進んで專攻せられ、博識の仁は之が批評に吝ならざらんことを望む。終りに、此研究に就て多大の指導と便宜とを與へられたる伊澤修二氏、猪熊淺磨氏、上田代吉氏、日本のローマ字社、三矢重松氏、藤岡勝二氏、吉澤義則氏、保科孝一氏、及其他の諸氏に感謝し、尙ほ編中の引用文に關しては、謹んで其の文主に敬意を表し、萬一誤用のものあらば、之を指摘せられんことを乞ふ。

四聲讚

魏祕書常景(文鏡秘府論)

龍圖寫象

鳥跡摛光

辭溢流微

氣靡輕商

四聲發彩

八體含章

浮景玉宛

妙響金鏘

(大尾)

語調原理序論

(三九)

四六	四五	同	四四	四三	同	同	同	同	同	四二	四三	同	四一	頁
一〇	一一	一七	一五	一〇	一三	三	同	三	同	一	七	一	一六	一行
引倒	エ	長音を	の	藏	噉	噉	噉	噉	噉	噉	カ	カ	鼻音の	誤
引例	イ	長音尾を	藏	噉	噉	噉	噉	噉	噉	噉	ガ	ガ	鼻音以外の	正
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
五三	同	五二	同	同	五一	五〇	四九	八	四七	同	同	同	四三	頁
一	一	一〇	一一	九	五	一二	六	四	一二	一四	一四	一四	八	一行
ヒ	孫	咳	全し	まで	ア行	外	オウ	音韻	背	(no又はi)	窮窟	カントン	誤	誤
T	孩	咳	全く	までも	ア行	別	オウの	音頭	背	(e又はi)	窮窟	カントン	正	正

國學院雜誌第廿二卷第十一號附錄

語調原理序論正誤
(十月號第四頁貼付)

[illegible]